

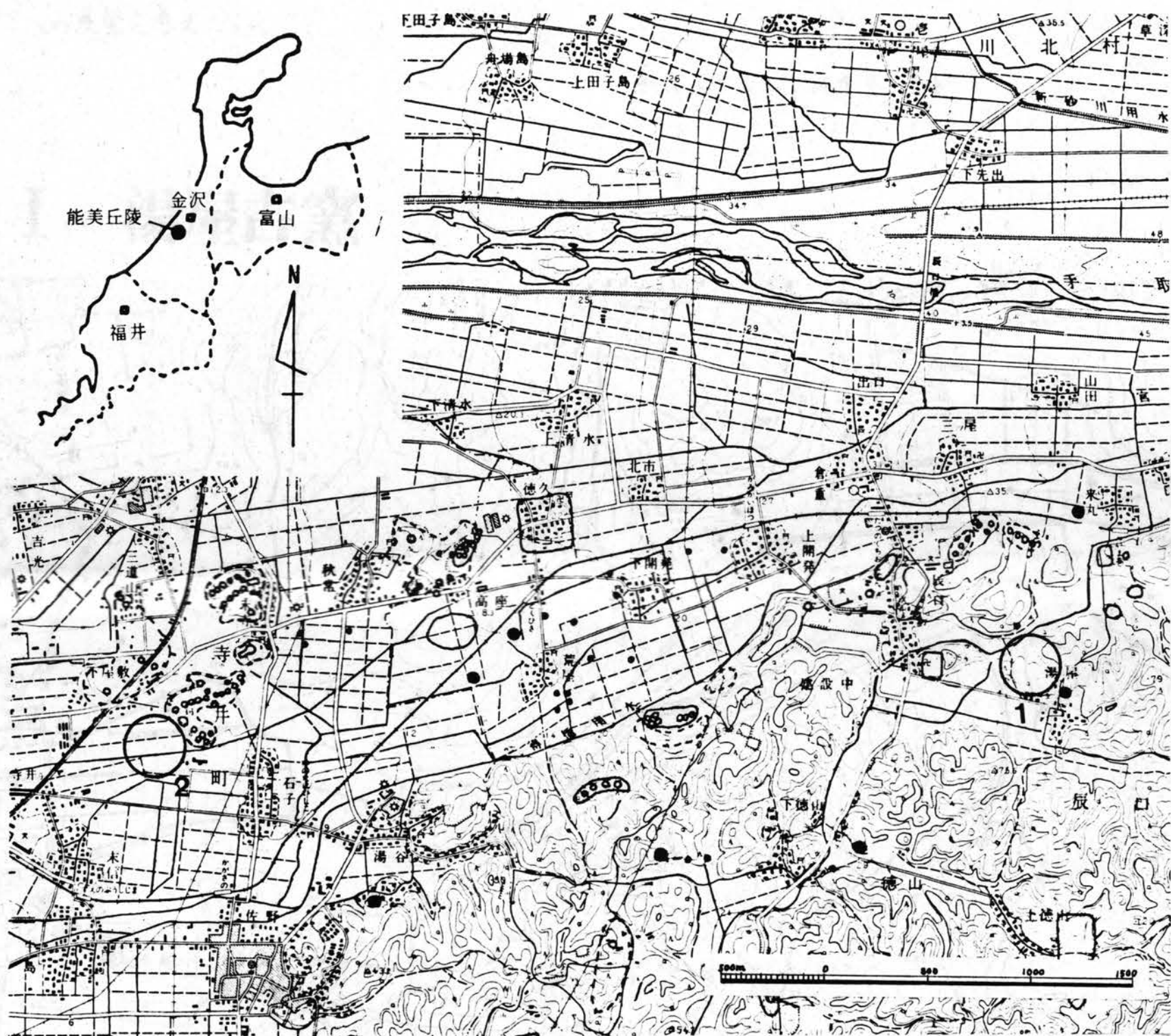
辰口町湯屋古窯（仮称）寺町和田山下遺跡（仮称） 調査略報

著者	金沢大学考古学研究会
雑誌名	金沢大学考古学研究会活動報告
ページ	1-35
発行年	1978-03
URL	http://hdl.handle.net/2297/00060486



辰口町湯屋古窯(仮称)

寺井町和田山下遺跡(仮称)調査略報



1978・3

金沢大学考古学研究会

はじめに

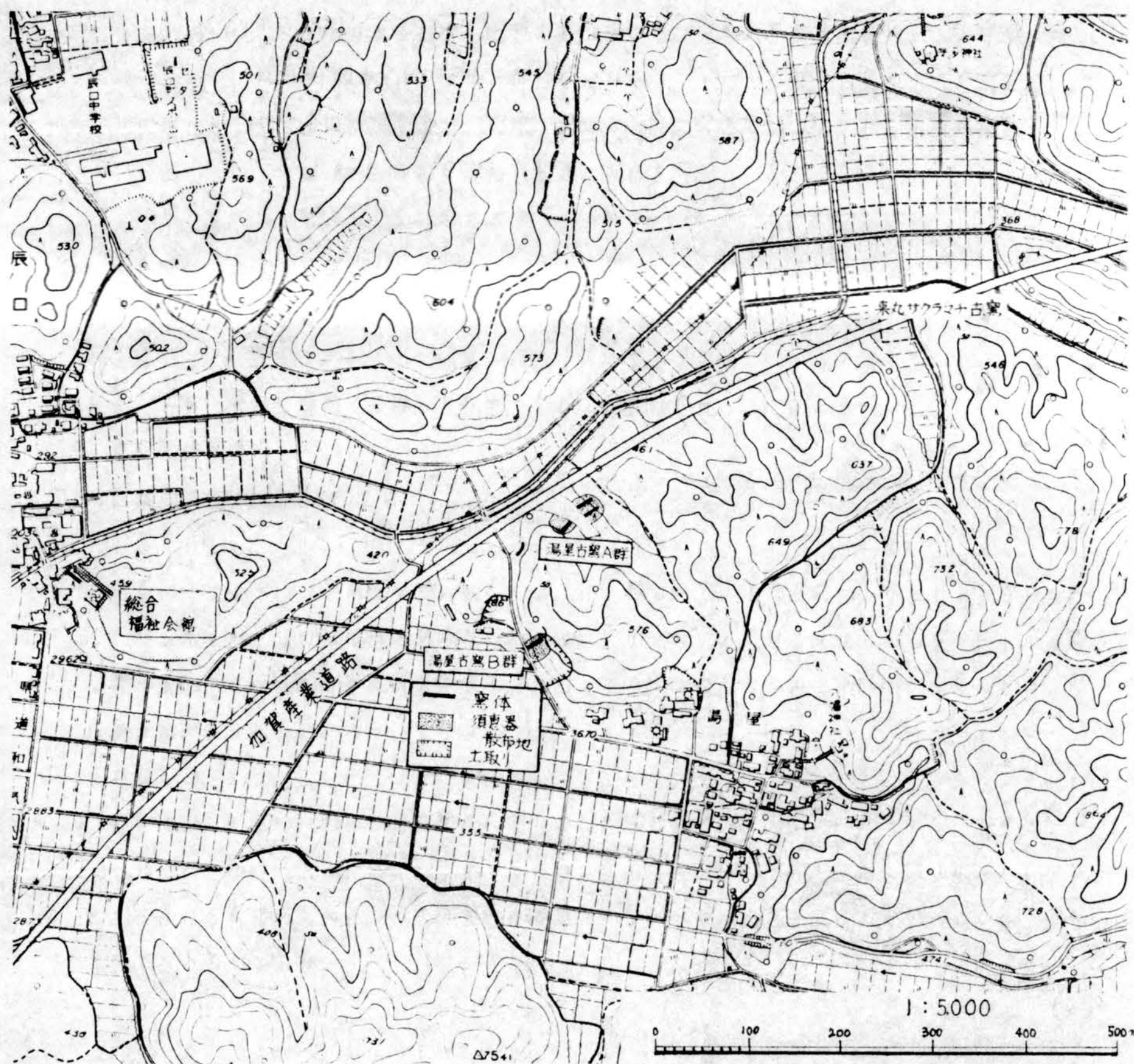
本書は当研究会が、昭和51・52年度に能美地域で行なった自主的な遺物分布調査において発見した辰口町湯屋古窯、および寺井町和田山下遺跡に関する略報である。

特に発見後ただちに連絡、保存要請が為されたにもかかわらず破壊された湯屋古窯B群中の一基については、破壊の経過を述べるとともに、再びこのようなことがないよう、今後の遺跡保存運動への展望を考えたい。

金沢大学考古学研究会 会長

倉島 清一

I 湯屋古窯



1 位置および現状

湯屋古窯は能美郡辰口町湯屋に所在し、能美丘陵を縦断する加賀産業道路沿いの谷の西斜面にA群、南側の尾根を越えた、平地に面する斜面にB群がある。

A群は昭和51年5月に当研究会が発見し、現在遺跡として認定され、保存されている。

B群は昭和52年5月に発見されたものであるが、陶土採取のための工事により破壊された。以下その経過を述べる。

昭和52年5月末 当研究会が行なった遺跡分布調査の際、土取り工事のため表土がはがされた時点で、須恵器片、瓦片が散乱しているのを発見。窯の存在を確認し、工事による破壊を防ぐため県教育委員会、辰口町教育委員会に連絡。

52年6月～10月 土取り工事継続。町教委と交渉。当研究会の「工事一時中止」の要請に対し、町教委は「工事の都合などもあり、しばらく様子を見る。」との返答。

52年10月下旬 土取り工事進行。灰原、窯体の一部破壊を確認。散乱状態の遺物採集。町教委に再度連絡。緊急に保存を要請。

52年11月初 窯体の完全破壊を確認。

2 採集遺物

湯屋古窯A群

採集遺物は、東斜面で約60片の須恵器、及び3片の瓦。西斜面で約10片の須恵器である。須恵器は杯蓋、杯身、甕類、壺類（平瓶、長頸瓶を含む）。瓦は平瓦のみである。

A 東斜面採集遺物

1 須恵器（第1～7図、1～55）

i) 杯蓋（1～12）

杯蓋は3タイプに分かれると思われる。まず第1類として、消失直前の「かえり」を有する1・2。第2類として、口縁端部を鳥嘴状に折り曲げ「かえり」の役目をさせている4・5、及び第2類が退化して口縁端部が丸味を帯びる6～11である。3は「つまみ」の形状から第1類に、12は第3類に含まれるであろう。

ii) 杯身（13～23）

杯身は細片が多く、特に口縁部破片に関しては問題は残るが、高台の形状等から、2タイプ（13～15・19・20）（16・17・23）が見られる。前者は後者に比べ外側に強く張り出すし、かりとした高台を有するもの、及び底部整形が粗雑でヘラ切り痕や、巻き上げ痕が残っている。高台を有しないものである。

iii) 甕類(29~43, 51~55)

大型甕が多いが中・小型甕もある。大甕のうち29~33は頸部に泥線をほさんで、2段の発達した櫛描波状文を有する点、及び口縁部の形態から、富山県金草1号窯出土遺物に類似する。

34は前者より時期は下降するであろう。また35・36は口縁部形態より大型の直口甕と思われる。

iv) 壺類(44~50)

底部破片がほとんどであり、器種を推定できるものはわずかである。44は平瓶の口縁、45は底口壺の口縁部である。残りのほとんどは長頸瓶の底部であろう。時期は今のところ不明である。

2 瓦(第10図56~58)

採集された瓦は平瓦片3点のみであり、いずれも裏面には斜格子状のタタキ目、表面は布目痕を有する。厚さは約1.5~2cmである。側面はヘラによる面取りを施している。51・52には斜格子状タタキ目の上にカキ目痕が見られる。

B. 西斜面採集遺物

1 須恵器(第11図59~65)

i) 杯蓋(59)

杯蓋は口縁部細片1点であるが、59は口縁端部が丸味を帯びており、第3類に含まれると思われる。

ii) 杯身(60・61)

杯身は高台を有するもの、有しないもの各1点であり、55は高台が剝落しており、その形態は不明であるが、底部に巻き上げ痕を残す点、胴部・腔部の形態から、また61は底部にヘラ切り痕を残す点、口縁部の形態から(13~15・19・20)のタイプであろう。

iii) 甕類(62・65)

大型甕片が数点、中小型甕片が1点である。大型甕62は口縁部形態、及び頸部における文様構成が東斜面のものと類似しており、ほぼ同時期のものであろう。も62と同様であるが、口縁部形態及び櫛描波状文にやや退化傾向が見られ、若干時期が下降するかもしれない。

以上のことより採集須恵器は金草1号並行(7C後半~末)、春木3号窯(8C前葉)、及び春木3号窯と和氣1号窯の中間(8C前半)の3期に分けられる。ただしこれは杯を中心にしての分類であり、甕・壺類については、まだ詳細な点検が必要である。瓦はわずかに片1か所平瓦のみであるため白鳳時代のものであると断言はとどめる。

湯屋古窯B群

採集遺物は、約60片ほどの須恵器（杯蓋・杯身・高杯・甕）および15片の瓦片（丸・平瓦）である。

1 須恵器（第12～15図，66～89）

i) 杯蓋（66～72）

すべて口縁内部にかえりを有する。かえりが、大きくしっかりしている66・67・68と、比較的小さい69・70・71・72との2タイプがある。66・72は、天井部が丸味をおびヘラケズリ痕はない。69・71は、天井部が扁平でヘラケズリ痕を有する。口径は、66は約12cm，67・69・71・72は約14cmである。

ii) 杯身（73～82）

高台を有するものは採集されていない。口径が14cm前後の74・75と、12cm前後の76・81・82との2タイプがある。前者は、口縁端部をつまみだしている。後者は、器高が前者にくらべて高く器厚の厚いもの（82）と薄いもの（76・81）とがある。82の胴部下端にはナデ調整が施され、その下部にヘラ切り痕が見られる。78には、明瞭なヘラ切り痕が見られる。

iii) 高杯・その他（83・84・90）

高杯脚83は、内外面にナデ調整・外面なかほどに2条の弱い地線が施され、薄い脚端が張り出している。84は、無蓋高杯の口縁部片と思われる。90は瓦ではなく、寺院の壁・床面にタイルのように使用されたものと思われる。

iv) 甕（85～89）

口縁部片は85のみで、口径24cm程度のわりあい小型の甕である。

2 瓦（第16～22図，91～106）

丸瓦片（91・92・93・94・95）と平瓦片であり、軒丸瓦軒平瓦は採集されていない。丸瓦片は、裏面に布目痕を有する。平瓦片は、表面に布目痕・裏面に斜格子状タタキ目を有する。91・92・93・94・95・100・102・104・106は焼成不良である。

以上のことにより、当古窯は7世紀後半代の金草第1号窯注(1)に先行する時期にはすでに使用されていたものと推定され、能美丘陵で発見されている古窯中もっとも古いものといえる。伴出している瓦も7世紀後半代のものとみなされる。

注(1)、岡崎卯一・藤田昌士夫『富山市金草第1号窯調査報告』1970を参照。金草第1号窯は7世紀後半から末にかけて使用された。

注(2)、今までに能美丘陵で発見されている古窯跡として苗生城山奥・サクラマチ・和気和田見・和気下和気・和気古窯跡群等がある。その内で最も古いものは、苗生城山奥遺跡（7世紀末～8世紀初頭）である。

小結

採集遺物により、当古窯群に関して次の2点が指摘できる。

第1点は、当湯屋古窯A群・B群が、7世紀後半から8世紀前半にかけてB群からA群へと連続的に使用された一つの古窯群を構成していたこと。

第2点は、瓦が伴出していることから、当古窯群が瓦を供給した寺院が、手取川以南の能美地域周辺に7世紀後半代には存在したことが推定されることである。

3. 湯屋古窯B群の破壊に関して

埋蔵文化財は他の文化財同様、歴史を解明するために非常に大切なものであり、国民共有の歴史的遺産として考えられなければならないものである。ところが今回、保護の立場にある文化財行政側（具体的には町教委）が、ほとんど何の配慮も為さず、また発見者としての当研究会からの保存への働きかけが弱い中で破壊されたことは非常に残念であり、また大きな反省を要することである。

当遺跡は工事の都合という理由で土取りが続行されたために破壊された。もちろん工事の都合も大切であろうが、問題はそのため最底限為し得た手段さえもほとんど考えられなかったことである。つまり窯体は工事区域の西側の隅の一部分にあり、その部分だけでも工事をストップすればよかったのである。我々も町教委に対し、そのような処置を要請したのであるが、受け入れられず、突然破壊されてしまった。

従来開発という名のもとに、相対的に文化財が軽視せられ、少数の大遺跡、有名文化財を除いて、従って文化財問題もともすればなおさらにされ、そのために破壊の危機に瀕した遺跡に対して、迅速で責任のある対策がたてられず、またそれで済んでしまうような状況になりがちであった。

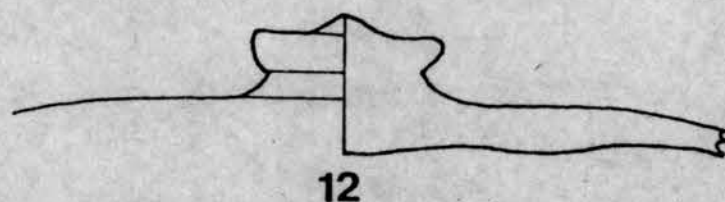
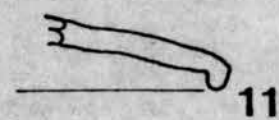
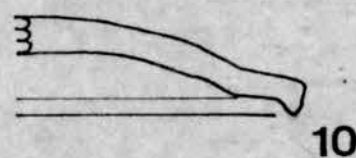
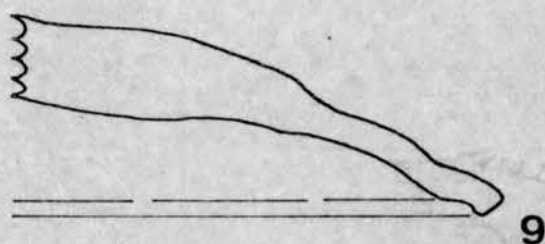
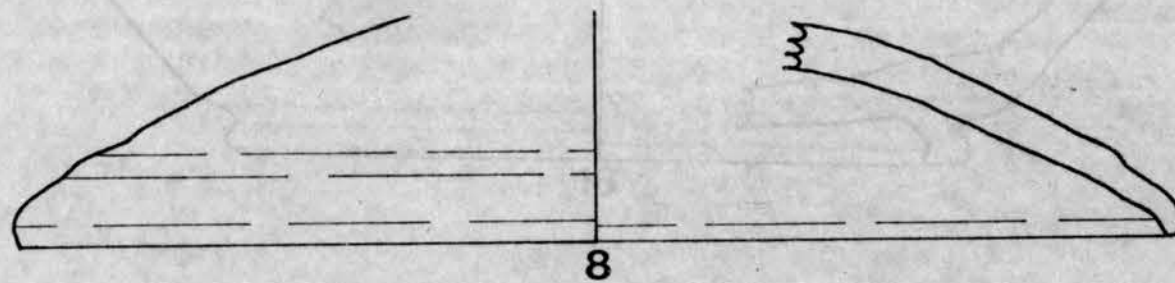
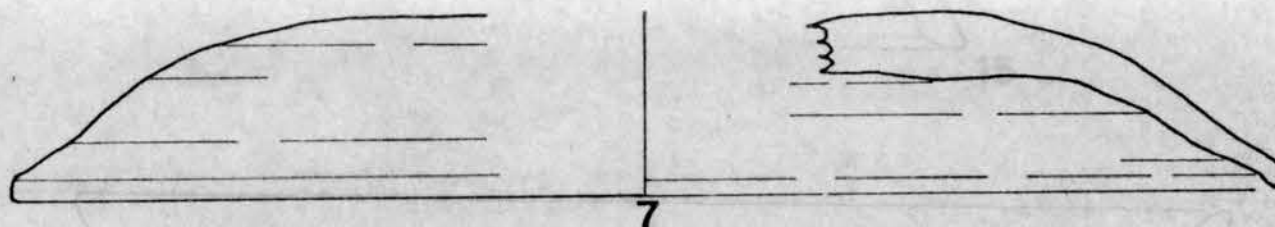
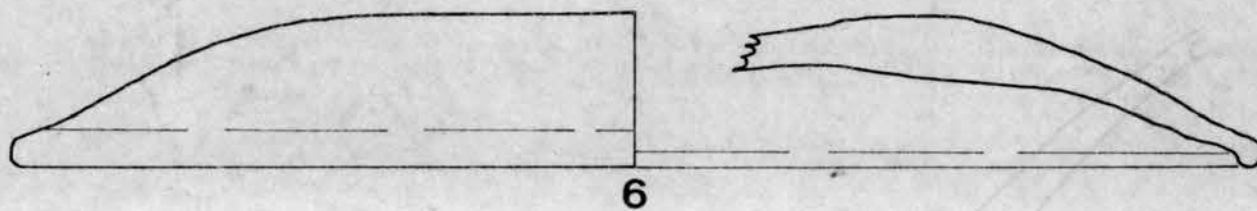
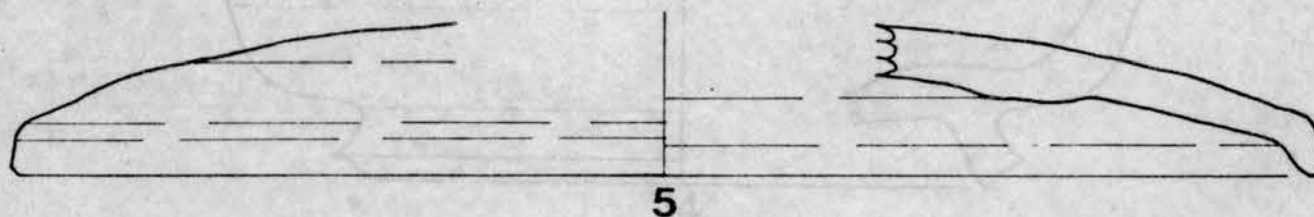
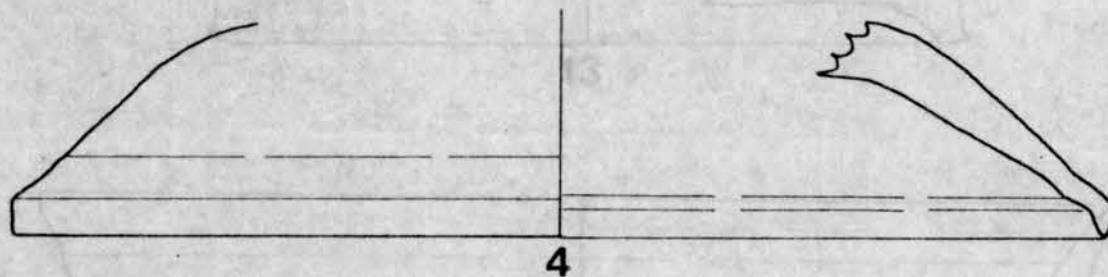
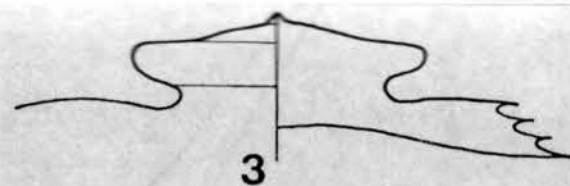
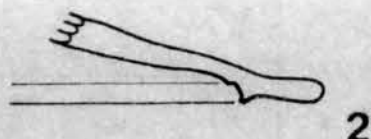
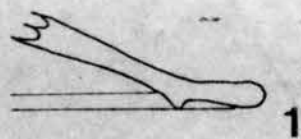
今回は開発とは程遠い土取り工事による破壊であったが、その原因として町教委の説明のように、工事ストップによる工事関係者側の損害に対する補償、対策に要する人員等の文化財行政の内容が整備されておらず、貧弱なものであるため、有効な保護が出来ないのも事実であろう。しかし文化財保護の義務のある行政側が最底限の努力を怠ったことは、行政全体において文化財が軽視されている中で、当局に保護というような意識がなく、ただ工事ストップに伴う摩擦を避けようとしていると解釈されても仕方がないであろう。

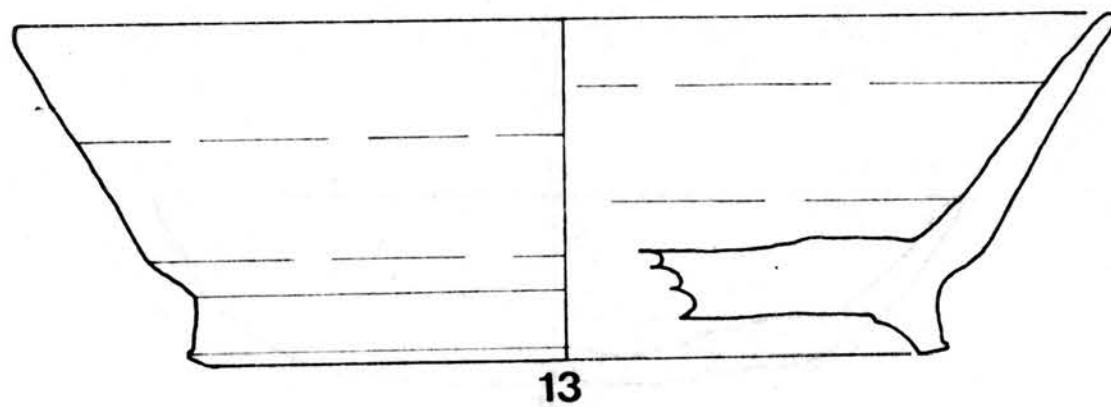
近來文化財の重要性が見直され、行政の責任も大きくなり、また研究者の責任も大きくなっているが、前述のような考えがあるとしたら問題であり、正してゆかねばならない。そのためには研究者からの働きかけも必要であり、そういった意味で今日の当研究会の動きは、正直なところ不十分であったと言わざるをえない。

我々は学生であるための限界もあるが、我々だけで出来ない部分は町教委あるいは石川考古学研究会等の研究者、関係者に働きかけるべきであろう。しかし町教委に対しては当初連絡しながら、

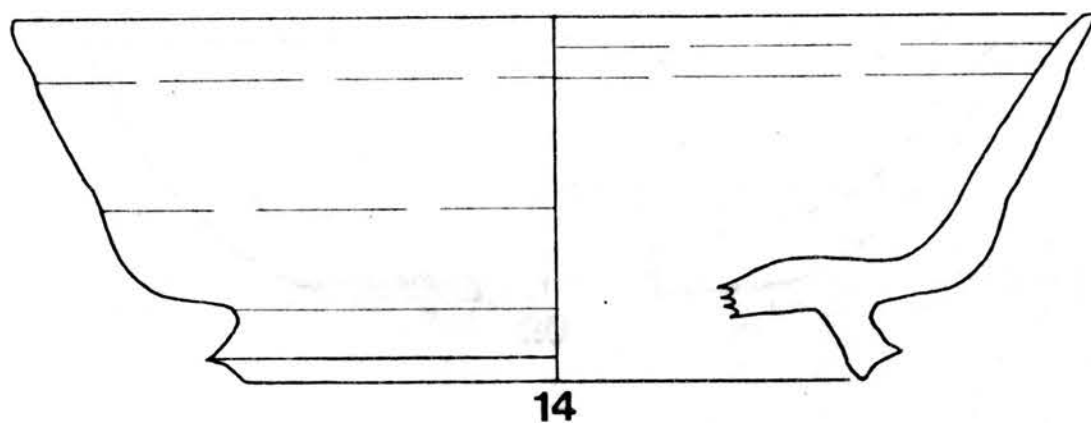
その後の連絡、相談がなかったため、遺跡の状態に関して誤解などもあったようであり、有効な対策が為されなかった。また地元住民、研究者に対しての働きかけも殆んどなされなかったのが実情であり、この点は反省をし、今後の保存活動の貴重な参考としなければならない。

我々は地元に住む人の生活を無視して、保存をゴリ押ししようとしているのではなく、今回のような初めから保護という考えを欠如したような破壊を無くしたいと考えているのである。そのためには工事関係者、行政側と研究者だけの話しあいだけでなく、地元住民の参加が必要である。しかしそれにはまだ遺跡に対する理解の不足や誤解もあり、困難なことが多い。それを埋めるためには我々からの働きかけが必要であり、当研究会もその一環として、昭和52年11月に辰口町総合福祉会館において、『辰口町の原始・古代社会』と題する展示を行った。今後も折にふれ地元の人たちと接触しながら、遺跡保護に関する認識を相互に深めていくことが大切であり、そのことによってのみ真に地元のためになる遺跡保存運動ができるようになるであろう。

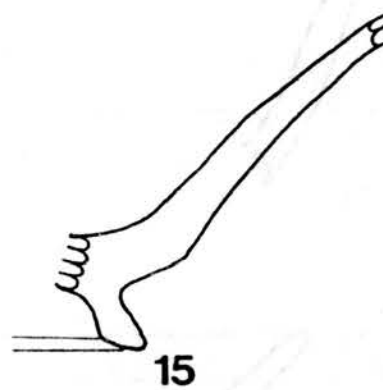




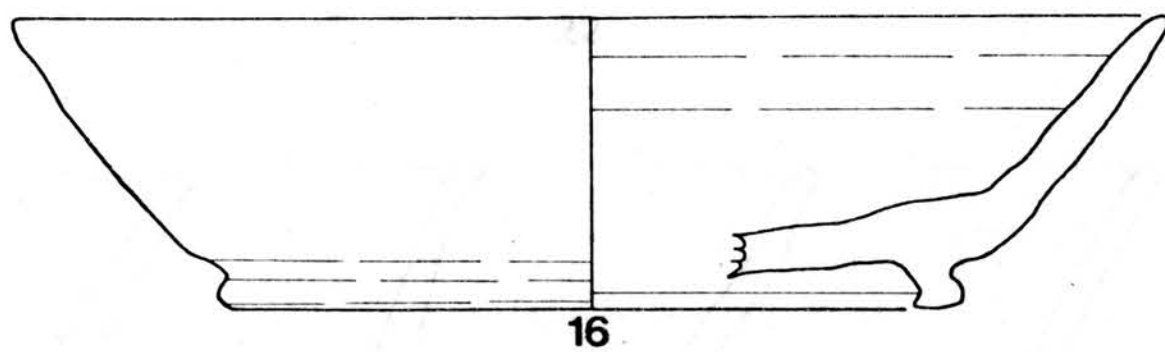
13



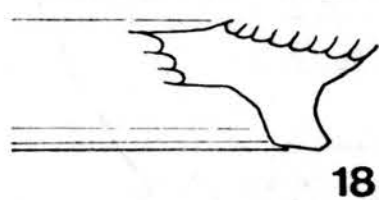
14



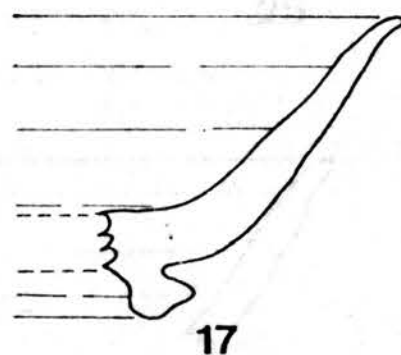
15



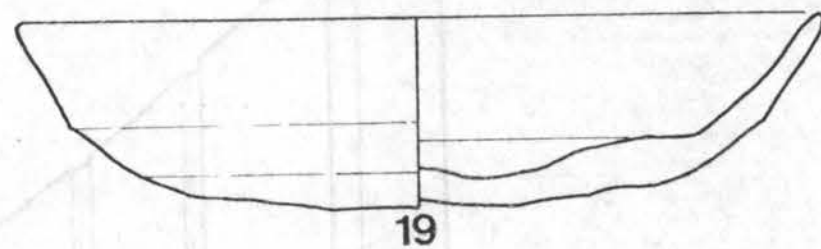
16



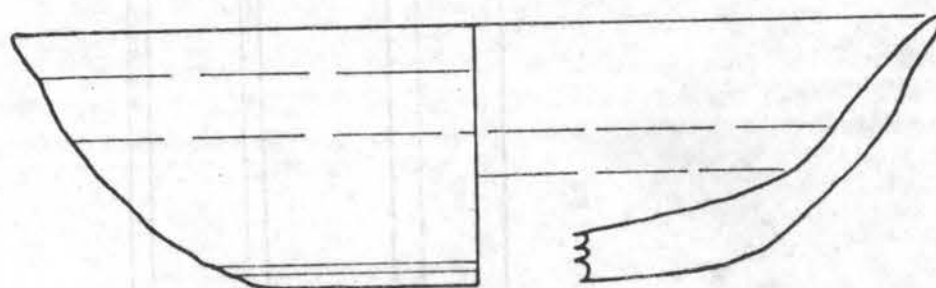
18



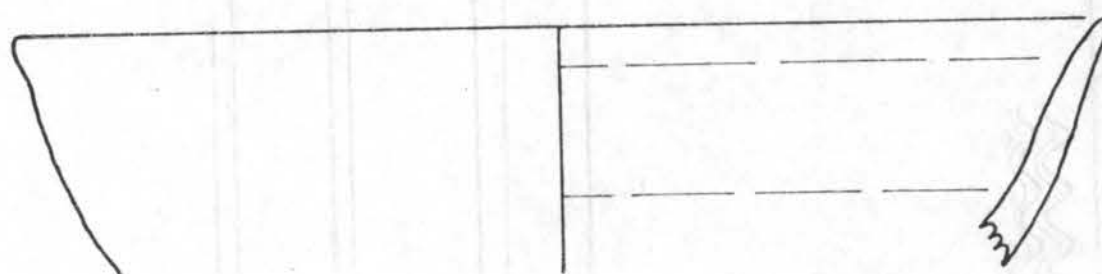
17



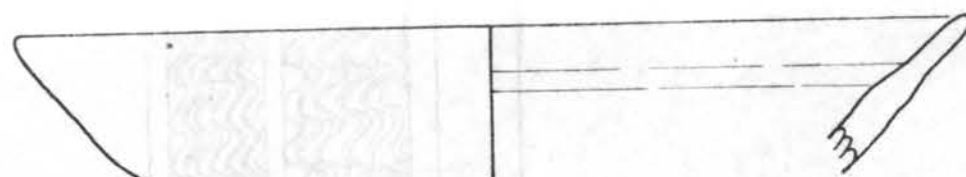
19



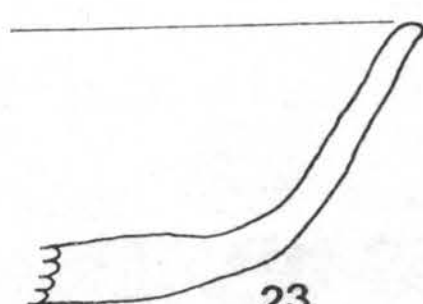
20



21



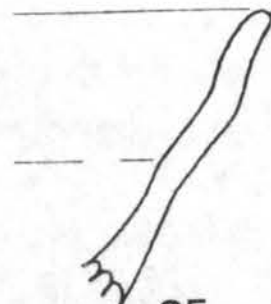
22



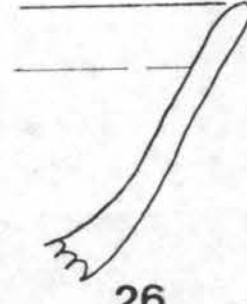
23



24



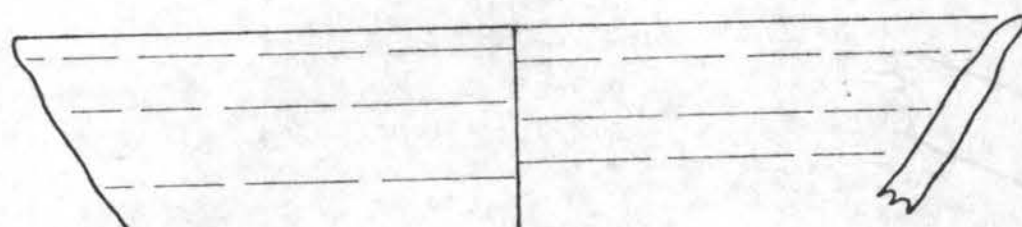
25



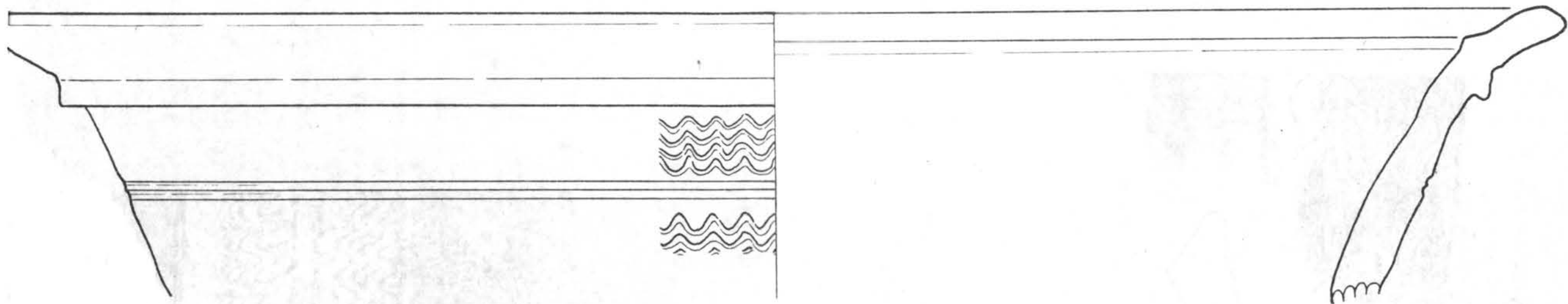
26



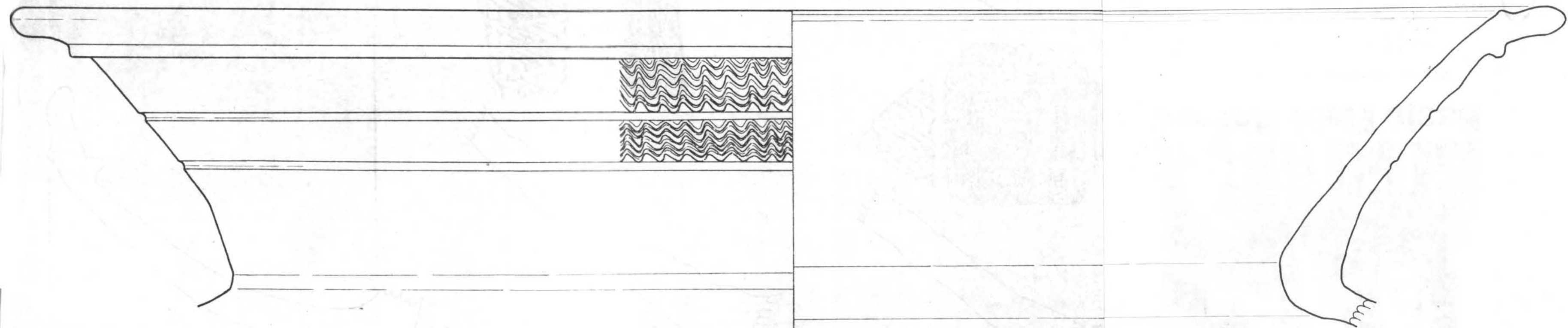
27



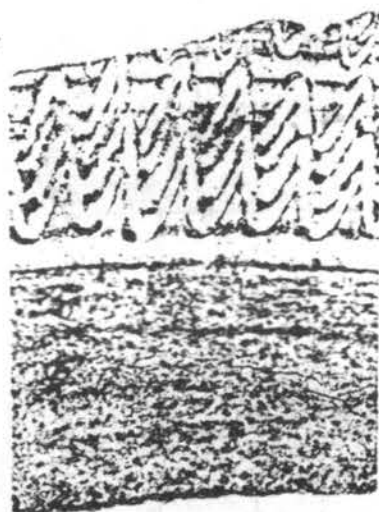
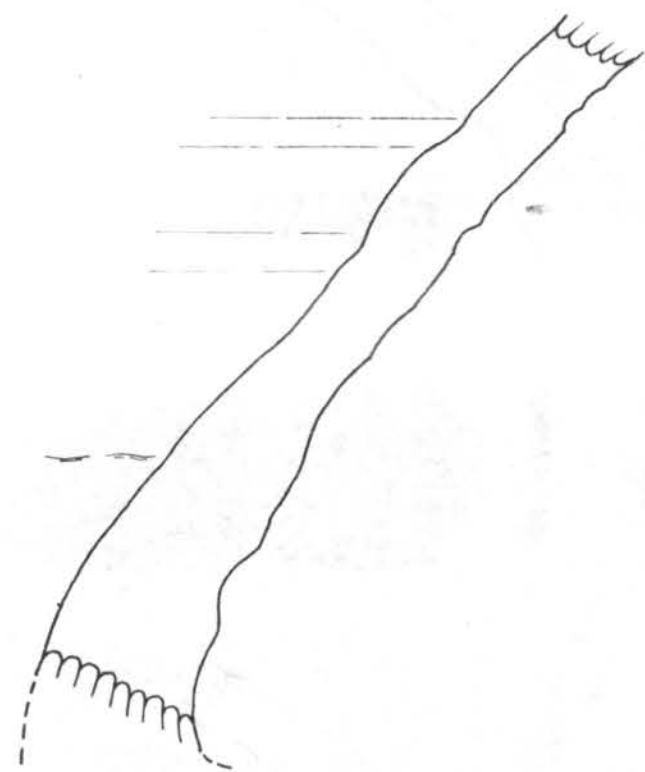
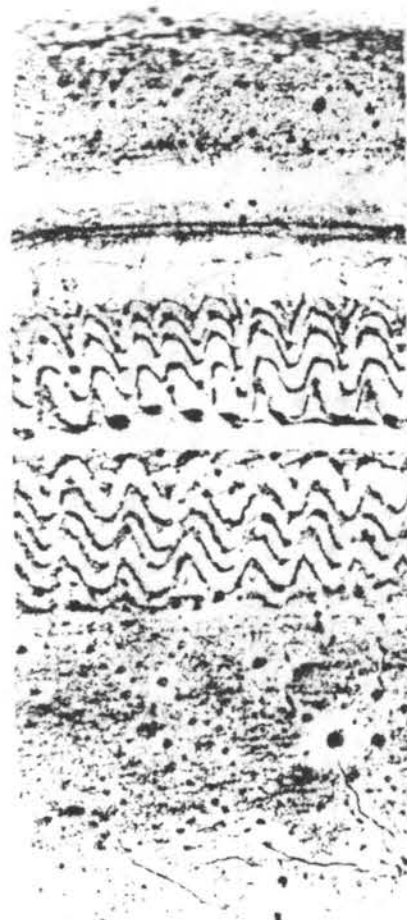
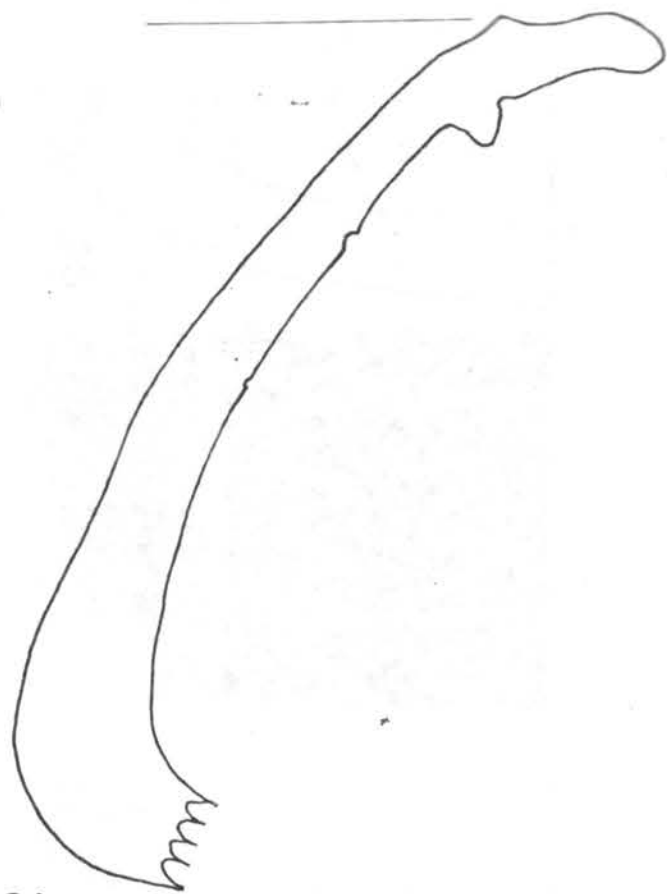
28



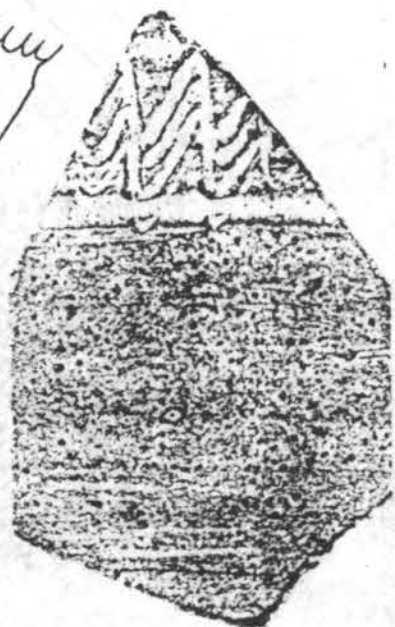
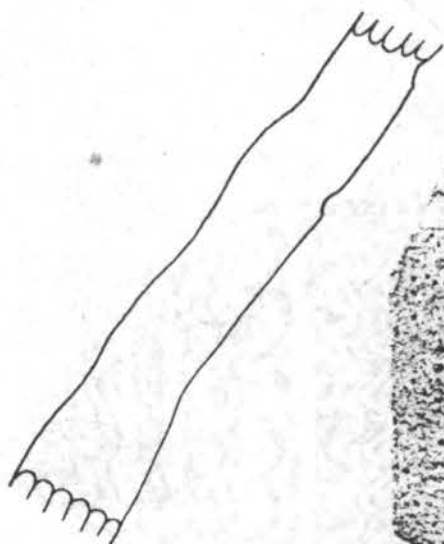
29



30



32

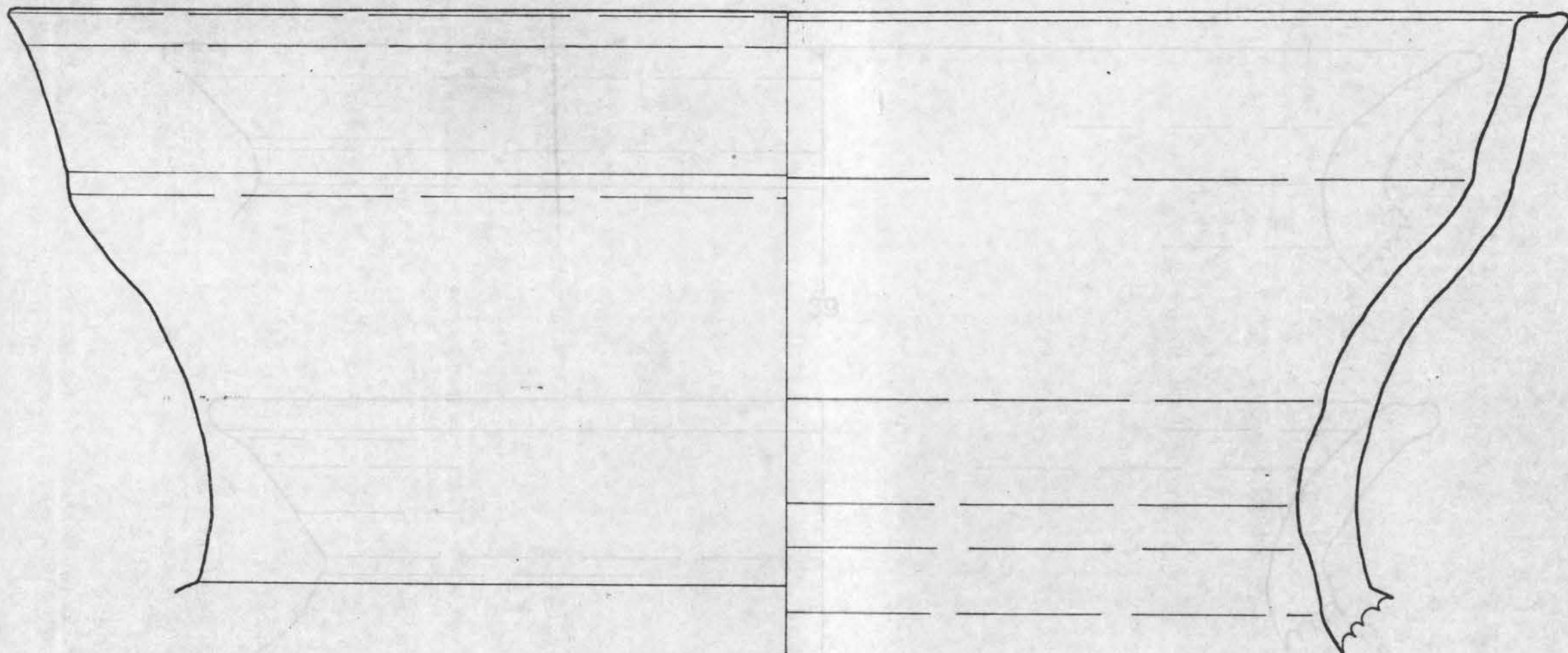


33

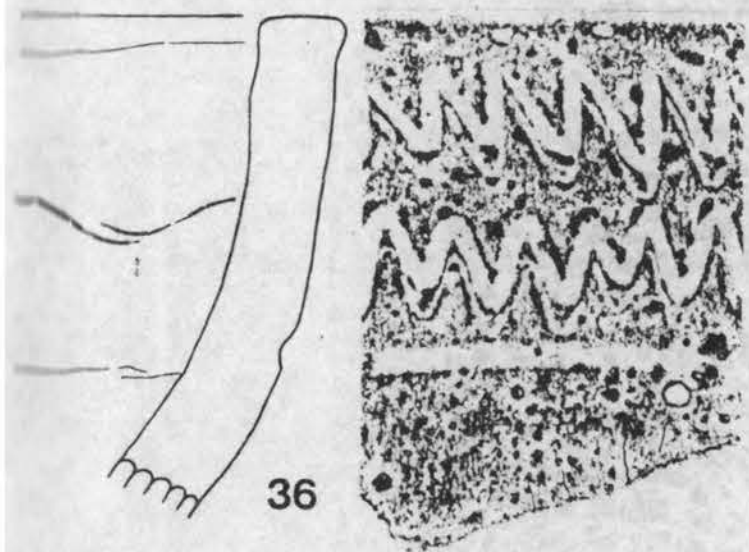


34

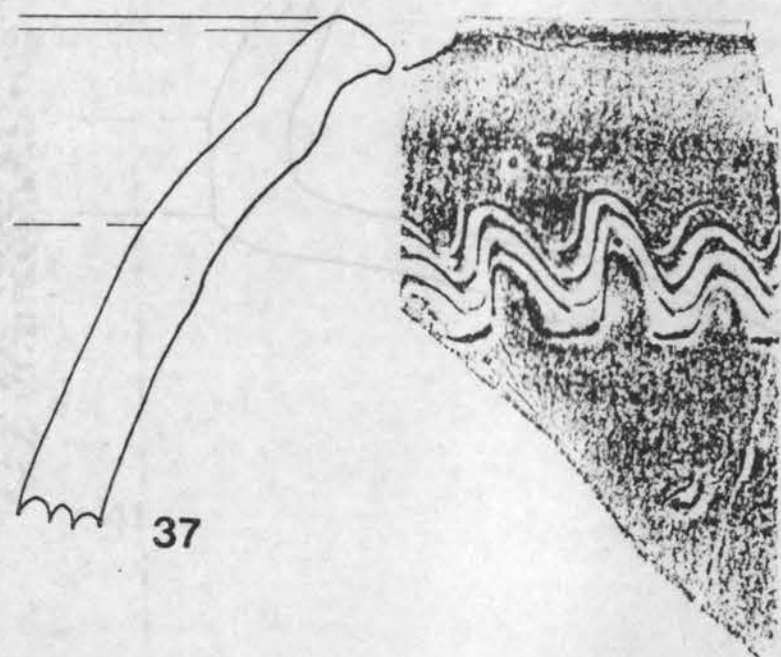




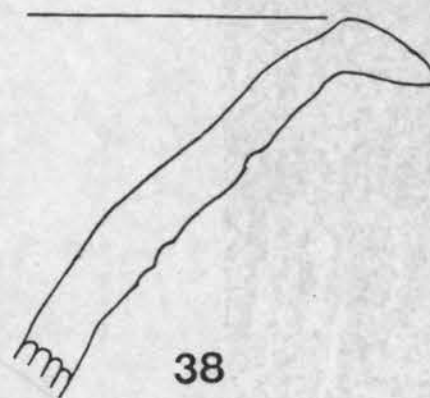
35



36

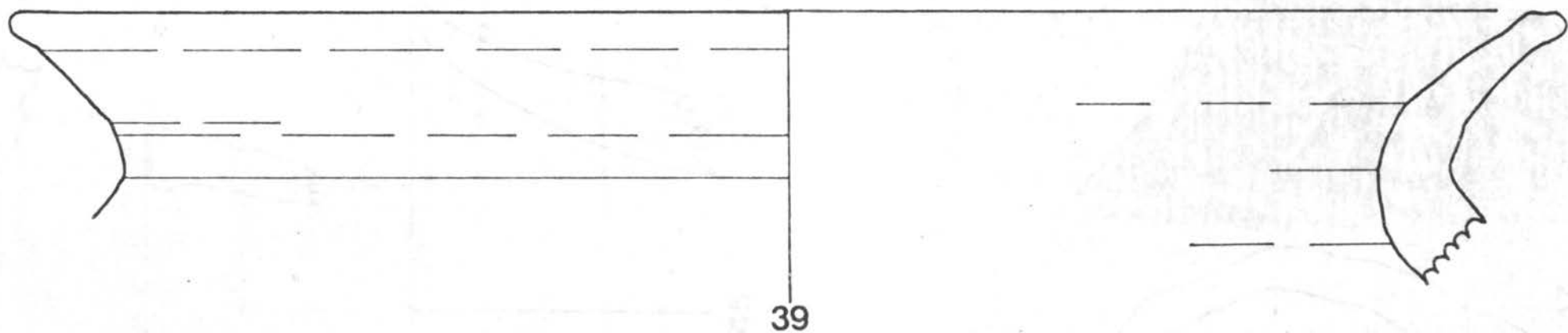


37

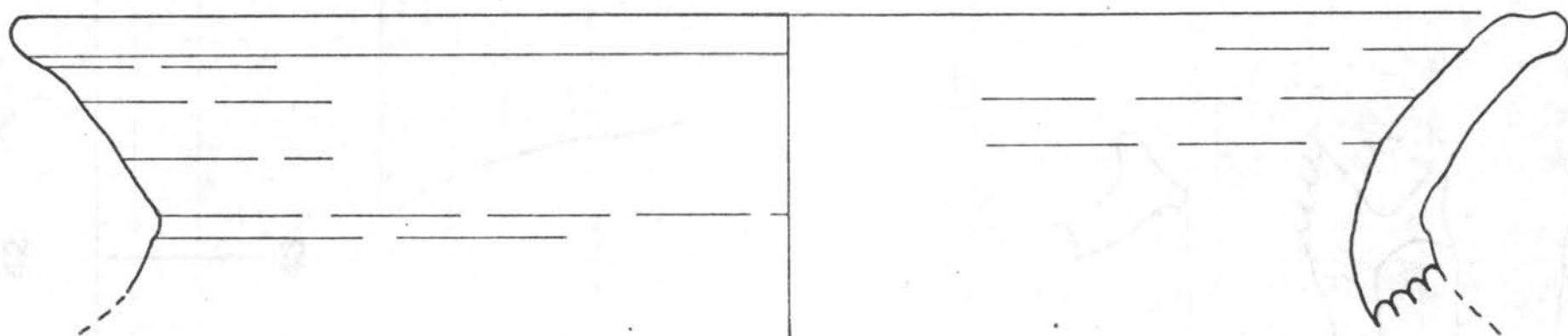


38

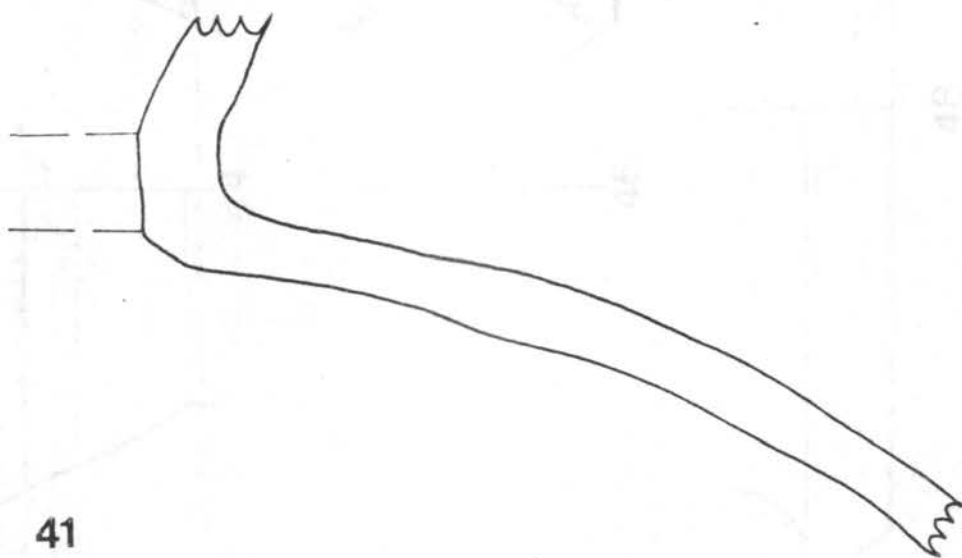
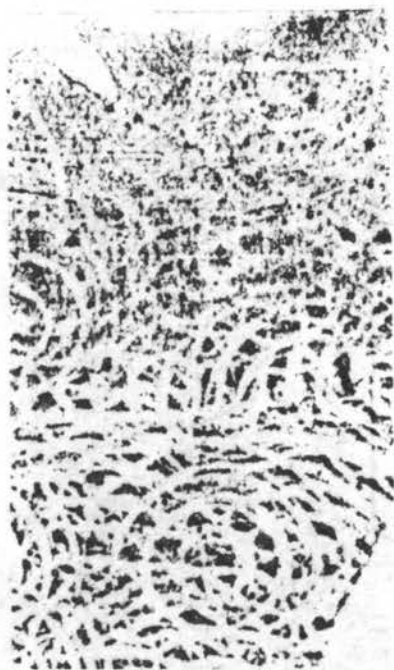




39

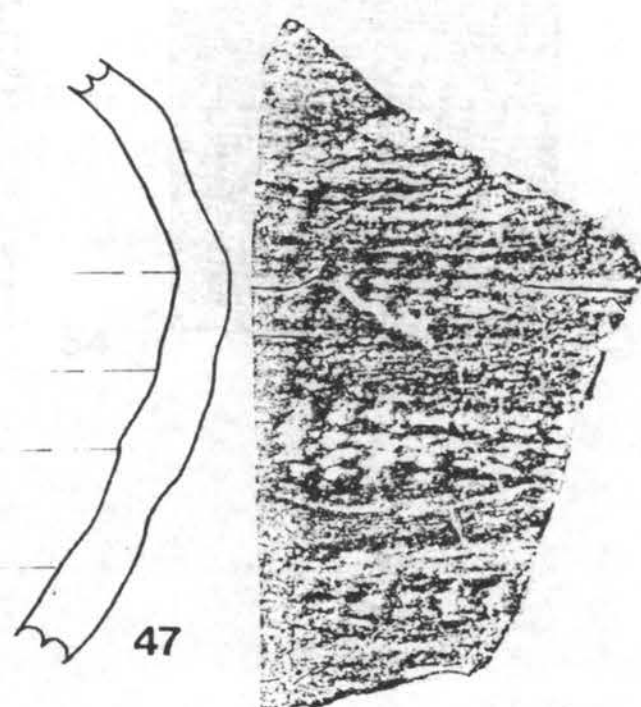
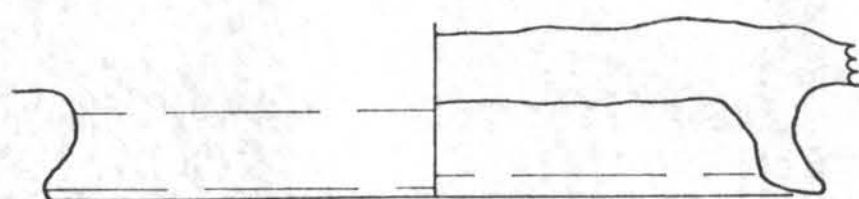
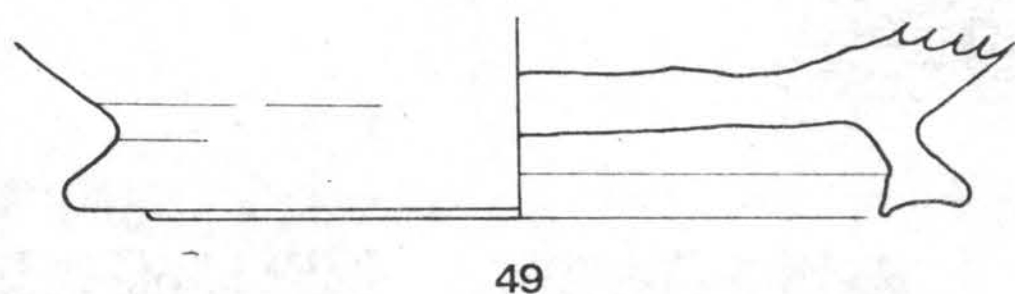
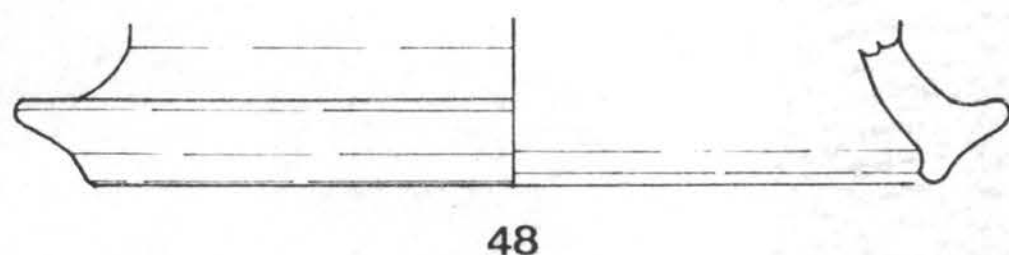
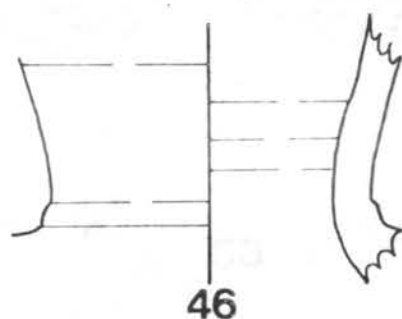
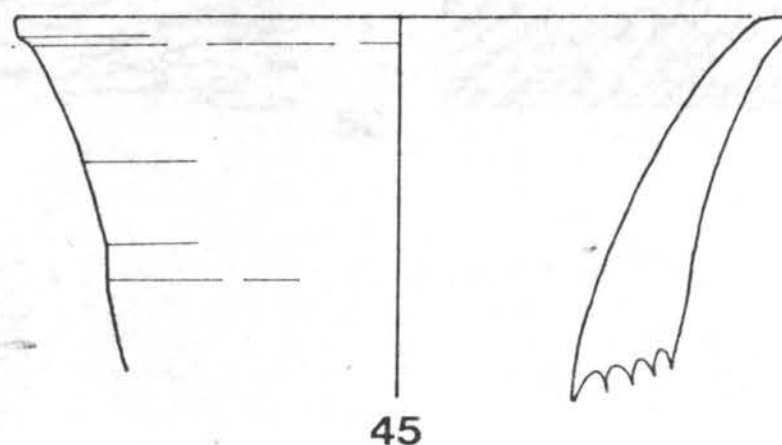
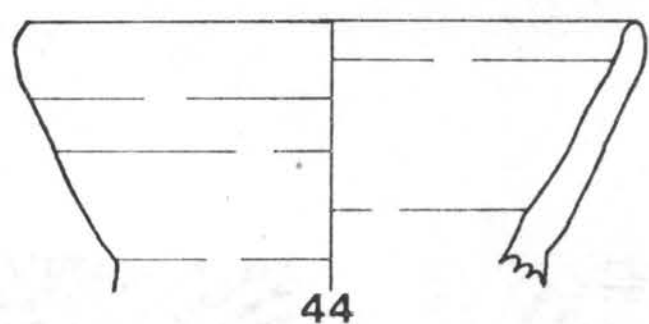
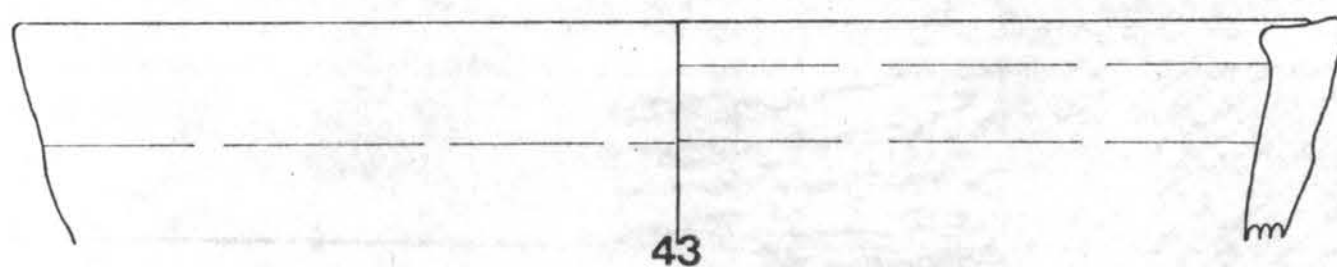
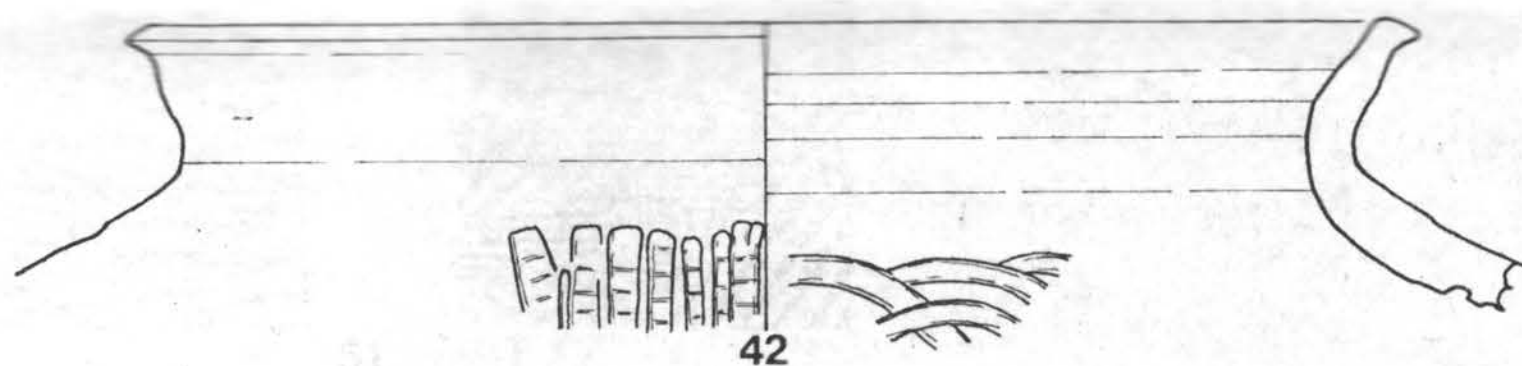


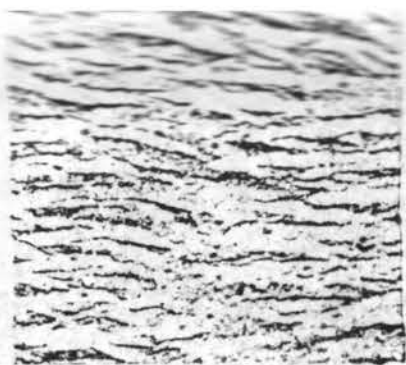
40



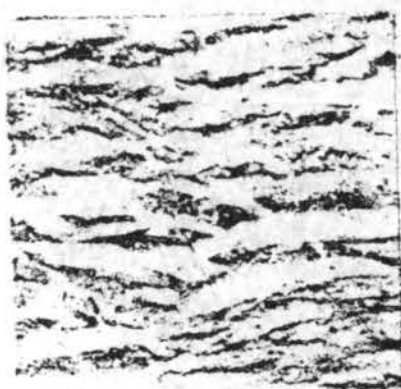
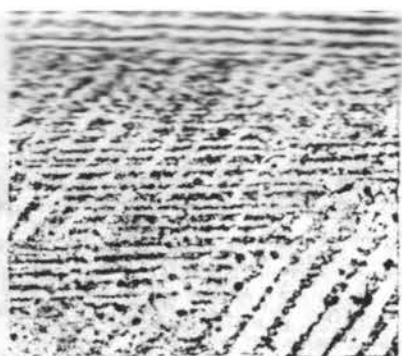
41







51



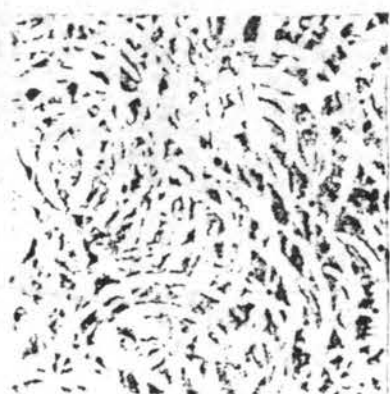
52



53

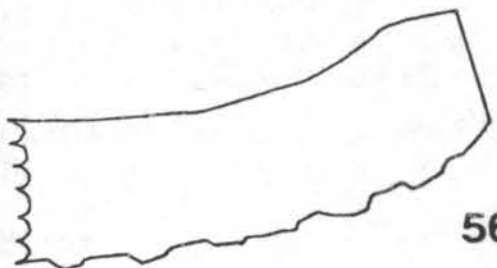
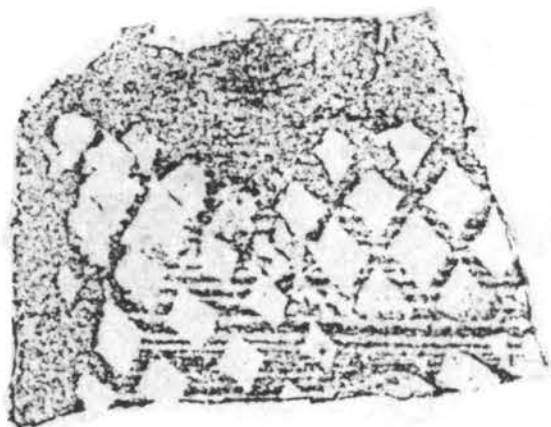


54

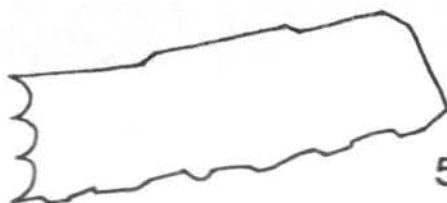
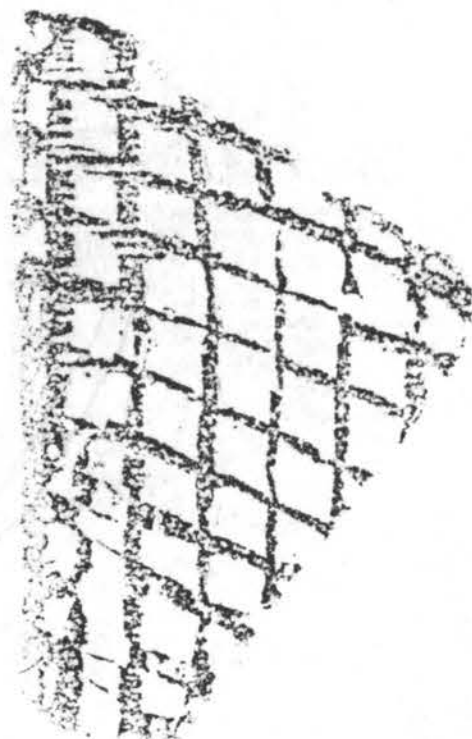


55

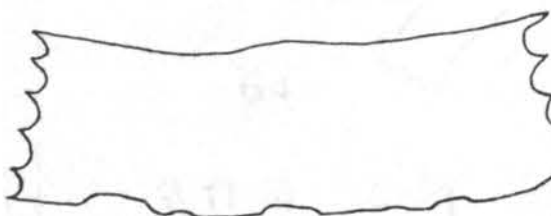
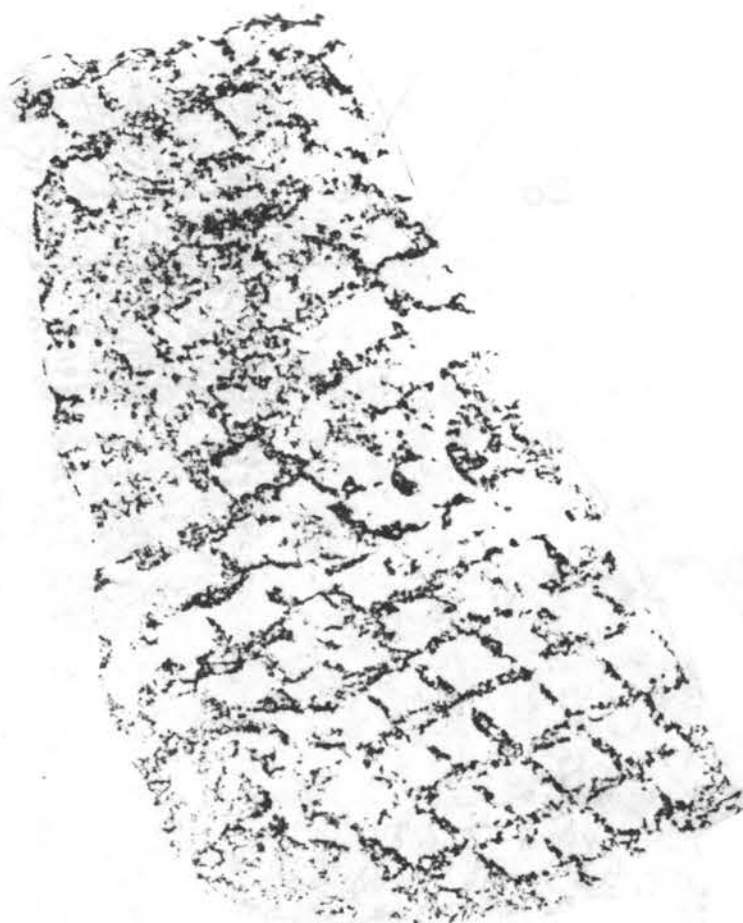




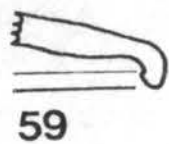
56



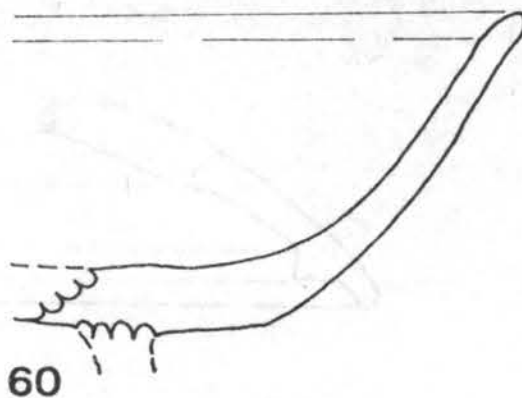
57



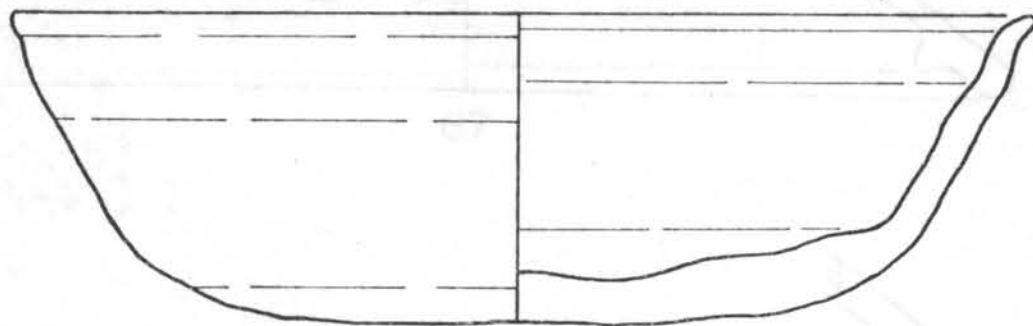
58



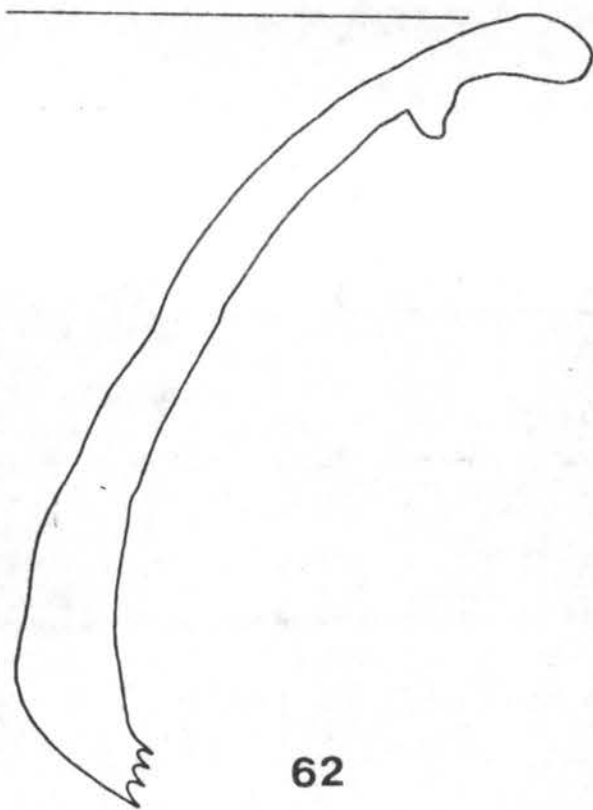
59



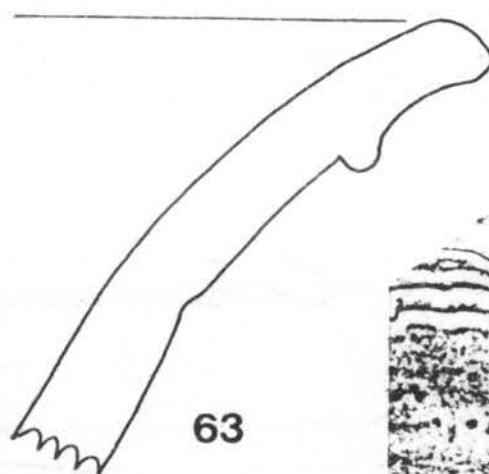
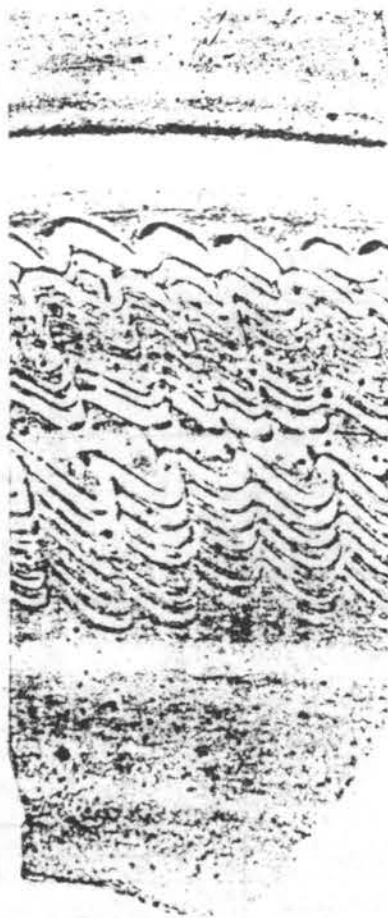
60



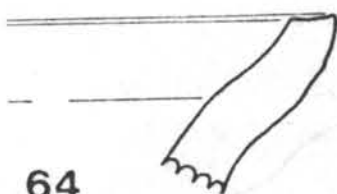
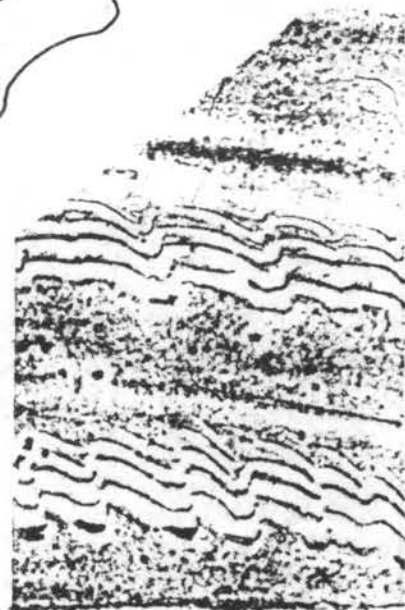
61



62



63

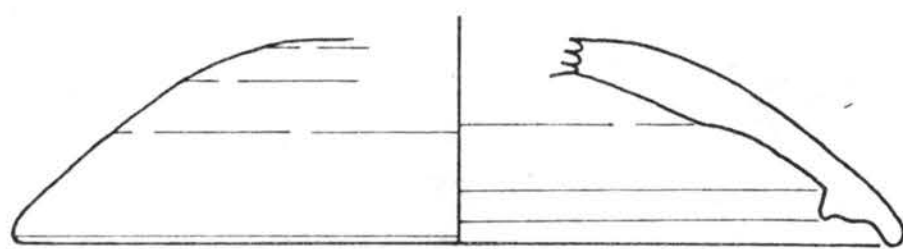


64

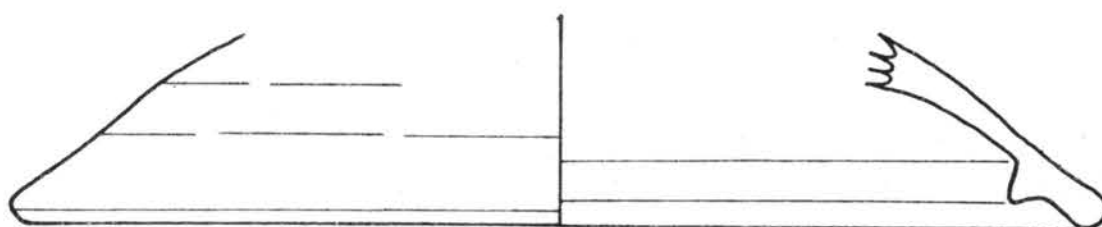


65

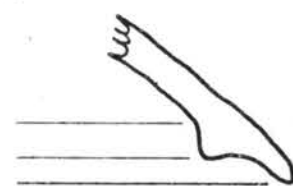




66



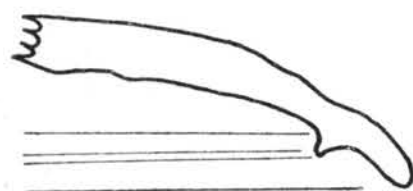
67



68



69



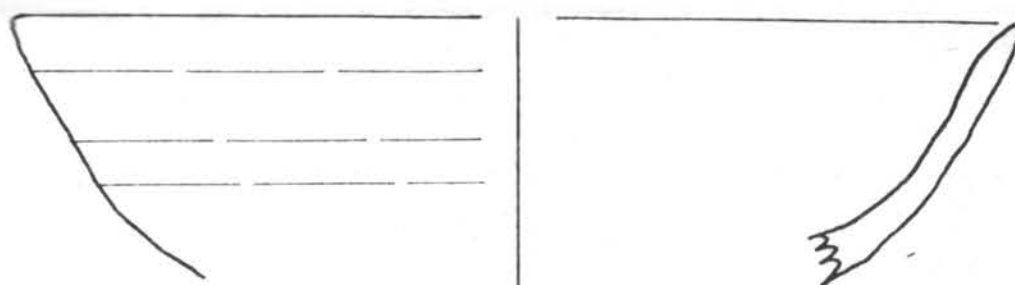
70



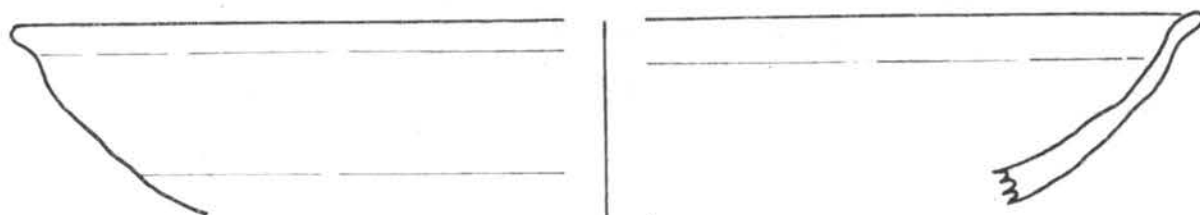
71



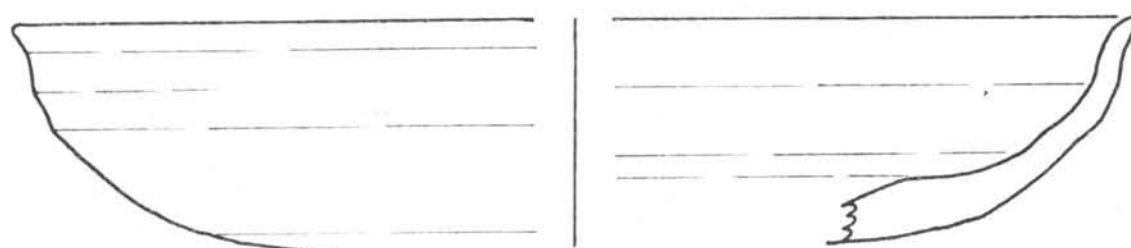
72



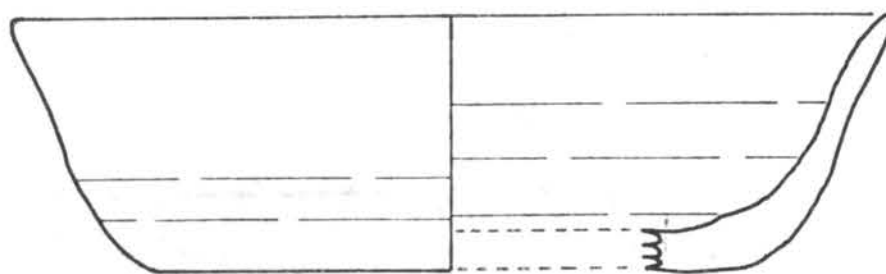
73



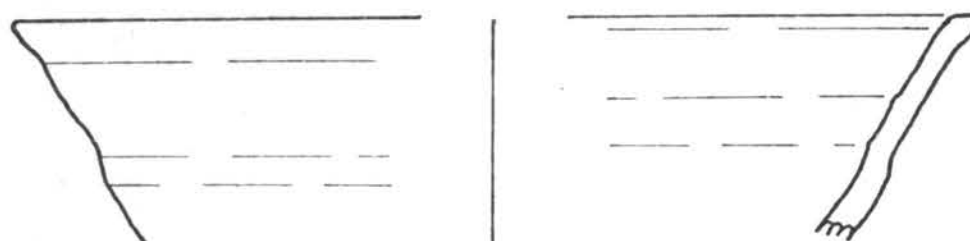
74



75



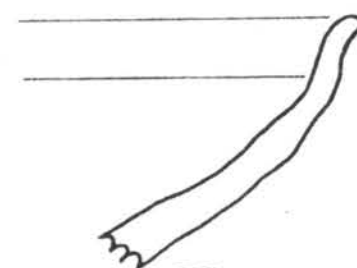
76



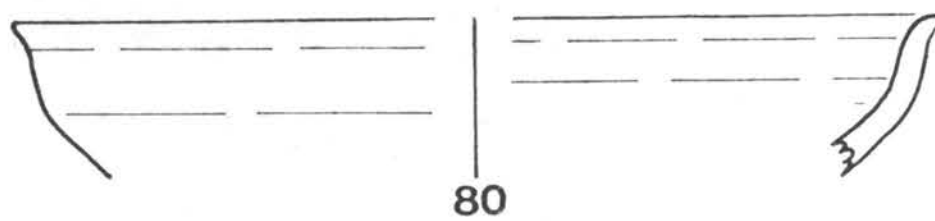
77



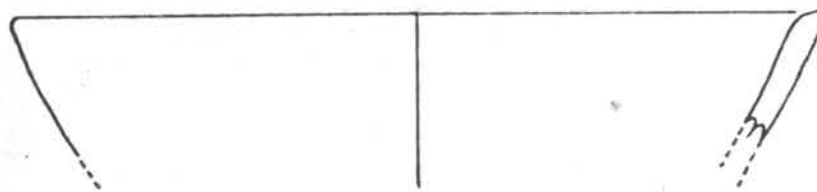
78



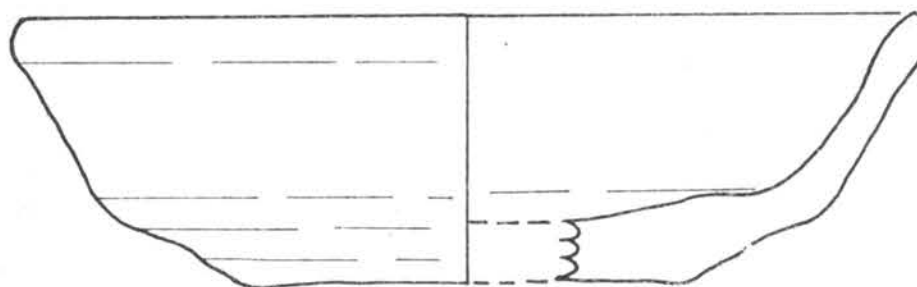
79



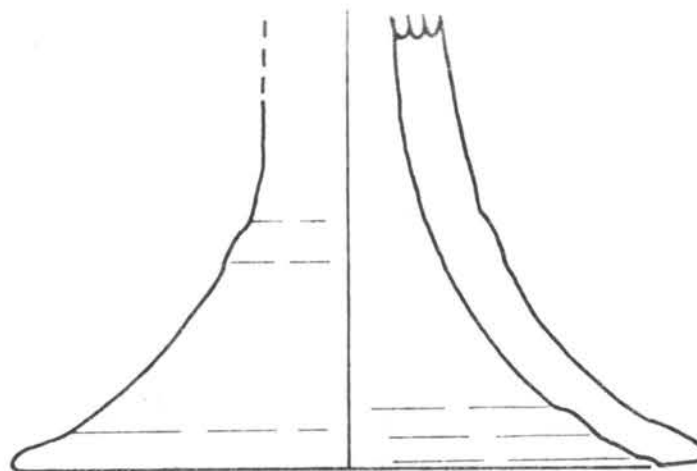
80



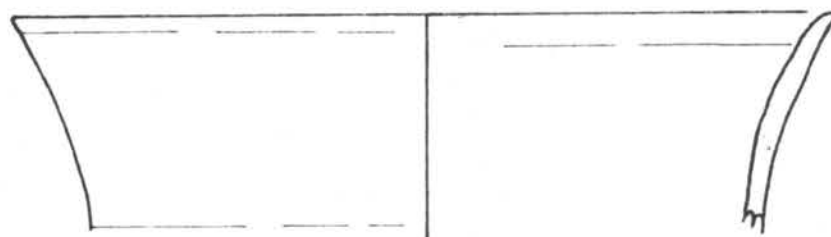
81



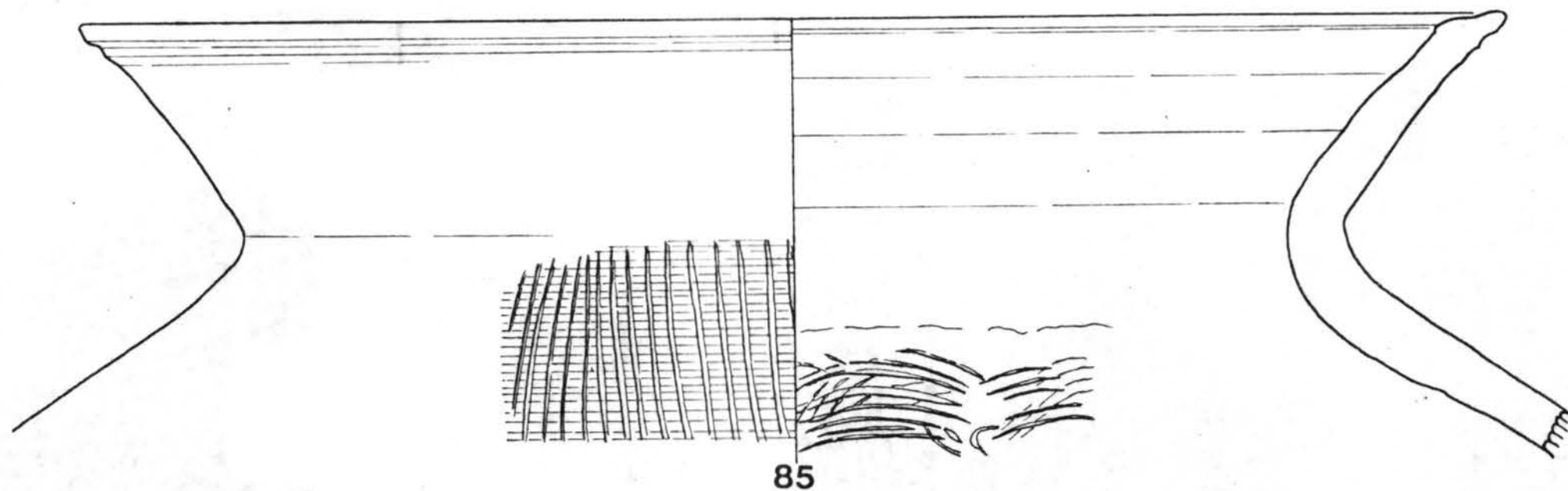
82



83



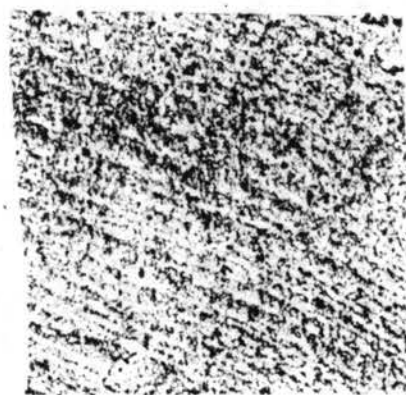
84



86



87

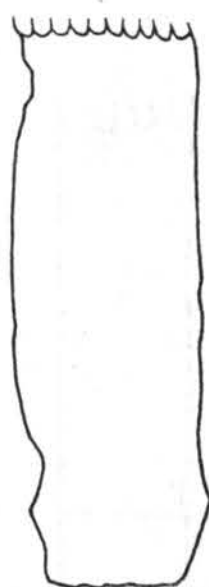


88

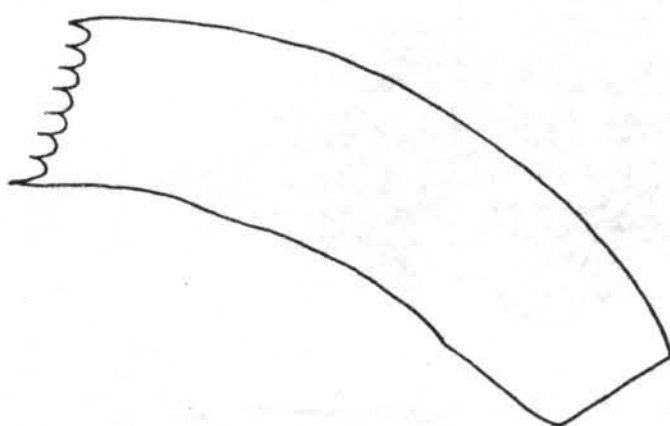
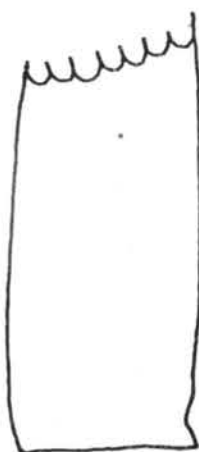


89





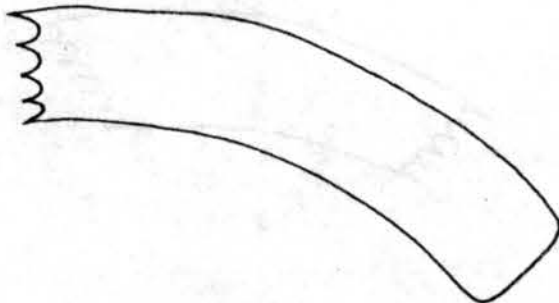
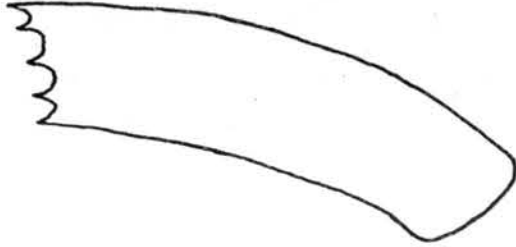
90



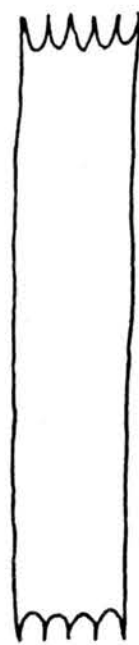
91



92



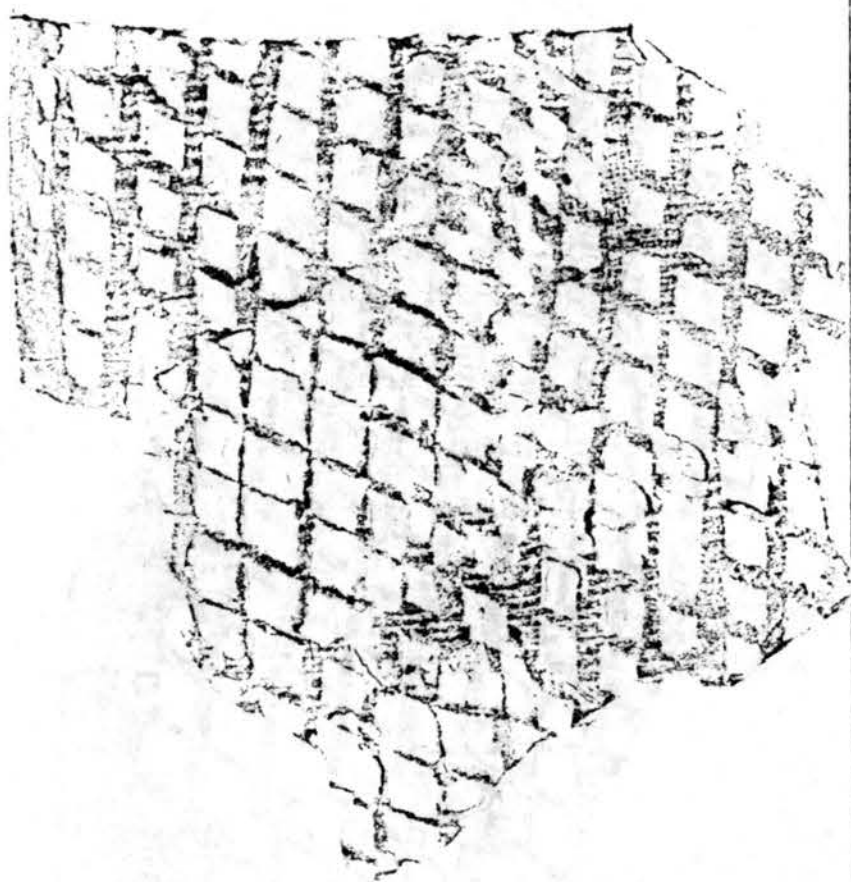
93



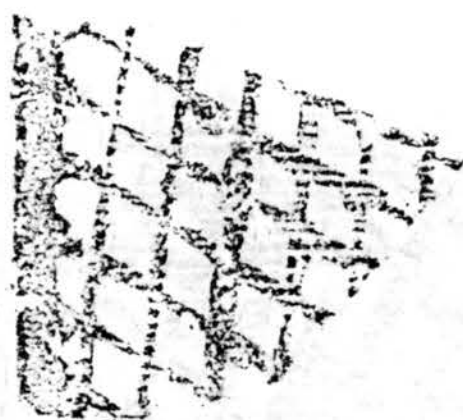
94



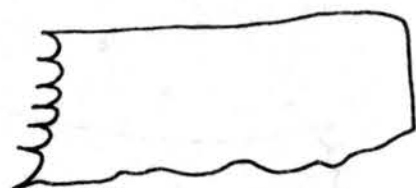
95

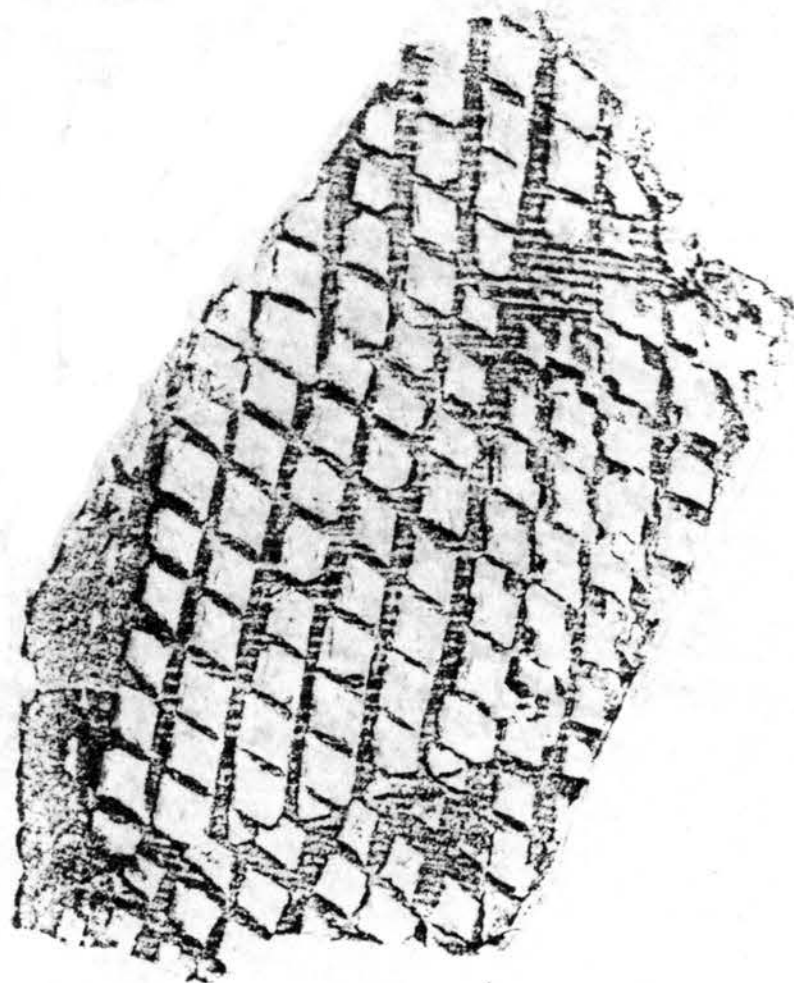


96

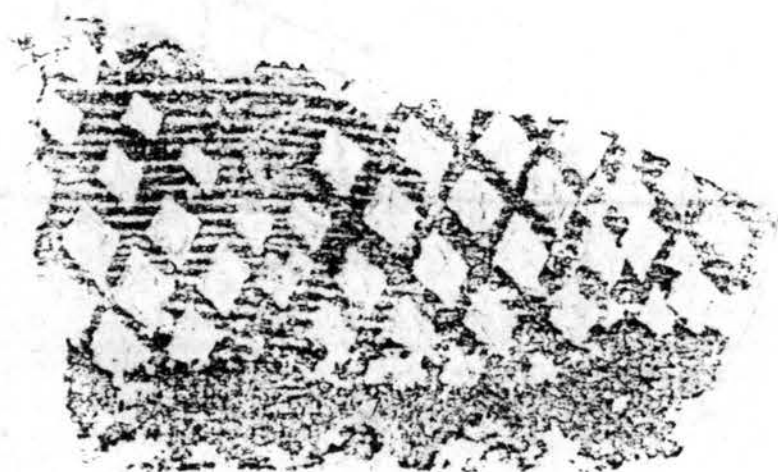
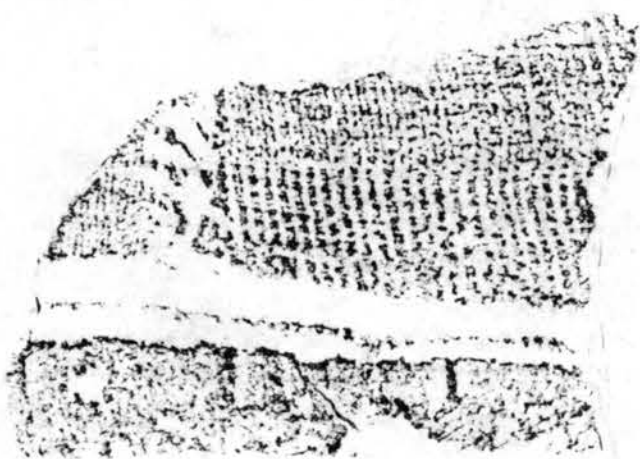


97

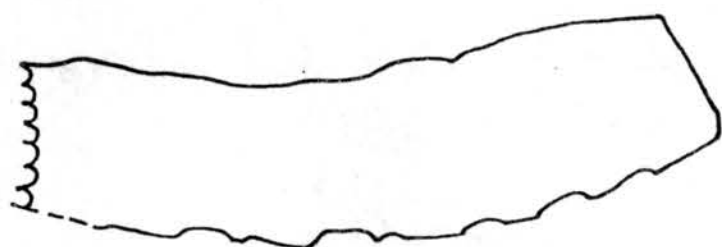
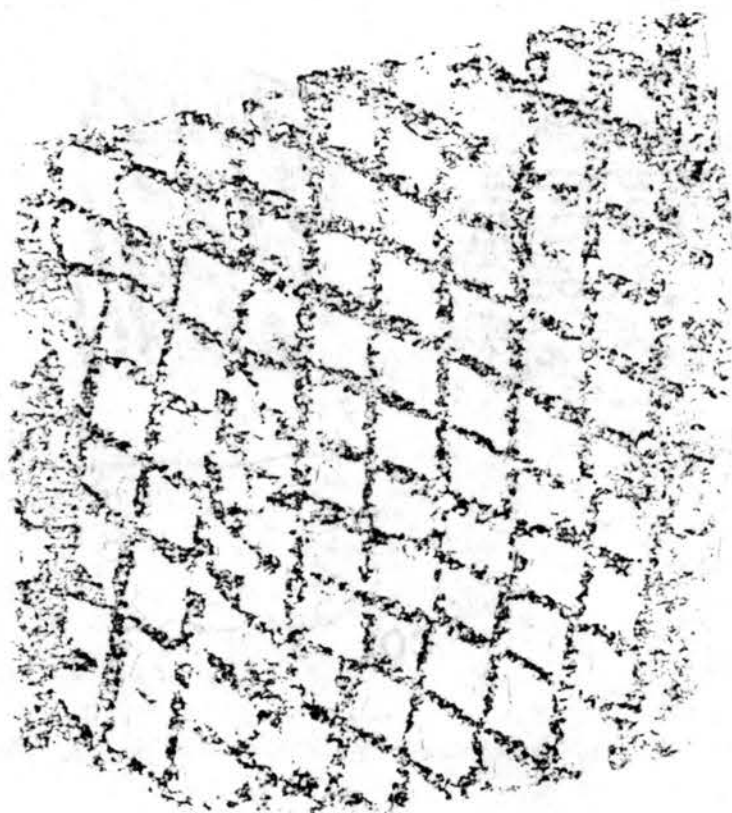
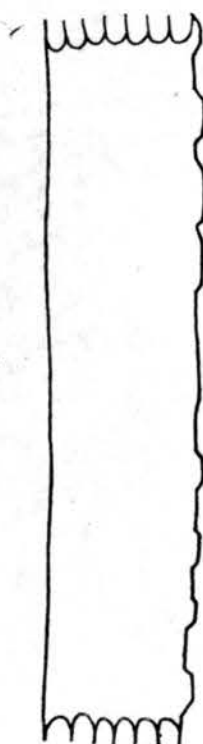




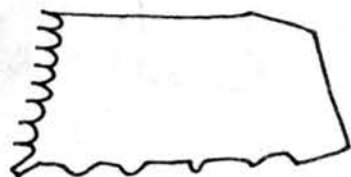
98



99



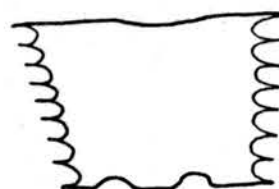
100



101



102



103



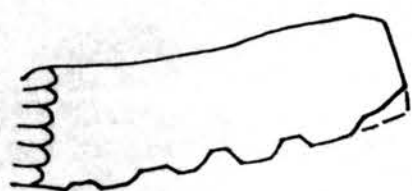
104



105



106



II 和田山下遺跡



- 和田山下遺物採集範囲
 52年夏 和田山古墳群調査範囲
 古墳
 住居跡、高床式倉庫跡

1 : 10,000

0 100 200 300 400 500 1000m

1. 位置 環境 発見の経過と現状

和田山下遺跡は、能美郡寺井町和田山の西南に位置し、遺物の採集範囲は全て水田、畑となっている。金沢大学考古学研究会は、過去10年間、能美地区において野外調査を行ってきた。この和田山下遺跡の発見も野外調査によるものである。以下、発見の経過を日をおって述べてみる。

昭和51年12月 和田山西南の畑で石鏃一片採集。

52年5月 同地域の農業用水路施設工事の際、掘り起こされた土中より土師器数片、縄文土器多数を発見。

52年6月 同地点より、土師器数十片、須恵器一片、縄文土器多数を発見。さらに、遺跡の範囲を確認するために付近の水田を調査した結果、土器片の他に打製石斧3点を発見。寺井町教育委員会に連絡。

2 採集遺物

A 縄文式土器(第23図 1~12)

約100片を採集したが、水田耕作により、磨滅した細片で、ほとんど粗製、無文のものである。

I類(1~3)

丸線文と三叉文が特徴的な精製土器。1の口唇には彫刻した三叉状連結文が見られ、2、3はともに、内外面ともにススが付着し、器面もていねいに調整されている。八日市新保式、又は御経塚式と思われるが、両型式への分類は困難である。

II類(4~8)

中屋式類似のものである。4は口縁内側を太めの管状のものでおしつけ、三角形の圧痕を有する。5の磨滅縄文部には朱彩の痕跡が認められる。6は口唇を指頭押捺しており、また7は、研磨された精製土器である。

その他

器厚は厚く、磨滅が著しい粗製土器である。

9、10は型式不詳であり、9は爪形文が施されている。

B 石器(第23図13、第24図14~16)

採集した石器は、打製石斧3、石鏃1の計4点であり、石質は右表の通りである。13・14は大型で、また16は調整が雑である。土器年代と特に矛盾するものは見当たらない。

13	打製石斧	玢岩(はんがん)
14	〃	宇山岩
15	〃	凝灰岩質砂岩
16	石鏃	頁岩(けつがん)

C 土師器(第25図: 17 ~ 23)

採集した土師器片は50片程度であるが、ほとんどが胴部片であり、器形を知り得るものは少ない。以下 概説する。

甕(17 ~ 20)

17は有段口縁をなし、口縁帯に擬凹線をめぐらすタイプで、口縁帯が比較的長く伸び内面に明瞭な指頭による押捺を施している。頸部内面は緩くくびれ、頸部以下櫛状具により調整している。外面には全体にススの付着が見られ、径約20cmと推定される。19は有段口縁をなし、擬凹線を施さない短い口縁帯は、全体に厚みがあり、端部を丸く仕上っている。頸部は鋭くくびれ、頸部以下外面には櫛状具による縦方向の調整、内面には横方向のヘラケズリ調整が見られ、径約14cmと推定される。20は有段口縁をなすと思われる甕の頸部で、頸部が鋭くくびれ、外面には5条以上の櫛状文がめぐり、内頸部以下はヘラケズリ調整により薄く仕上っている。

高杯(21 ~ 23)

21は高杯の杯部と思われ、内外面入念に磨かれている。22、23は脚部片であり、それぞれ端部で径約14、16cmである。

甕類の17、18は口縁帯内面の指頭押捺、頸部内面の櫛状具調整などに塚崎Ⅱ式の様相を見せるが、口縁帯の外反が見られないなど、全体的に若干さか上る要素を有する。20は類別がなく不詳であるが、19は明らかに塚崎Ⅱ式の様相を呈し、高杯形土器21も同時期に特徴的な器形である。実年代は明らかではないが、一応4世紀前半代としておく。

昨夏の和田山古墳群発掘調査によって同時代の住居跡・高床倉庫跡が発見され、それに伴ない多数の土師器も発掘された。まだ未整理ではあるが、甕類の特徴などから同時期のものと思われ、興味深い問題である。資料が少なく関連を云々することは困難であるが、和田山14号墓(方形周溝墓)との関連も含め、今後の調査に期待したい。

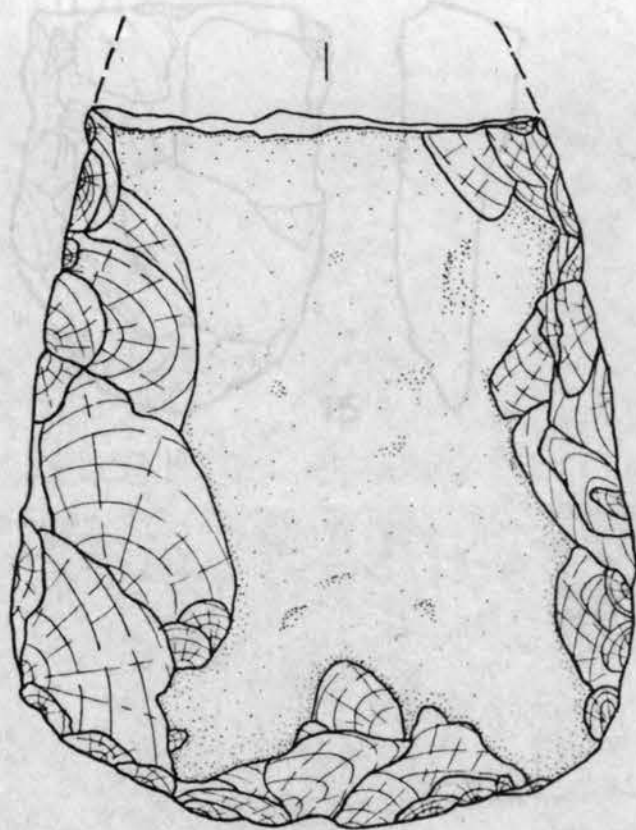
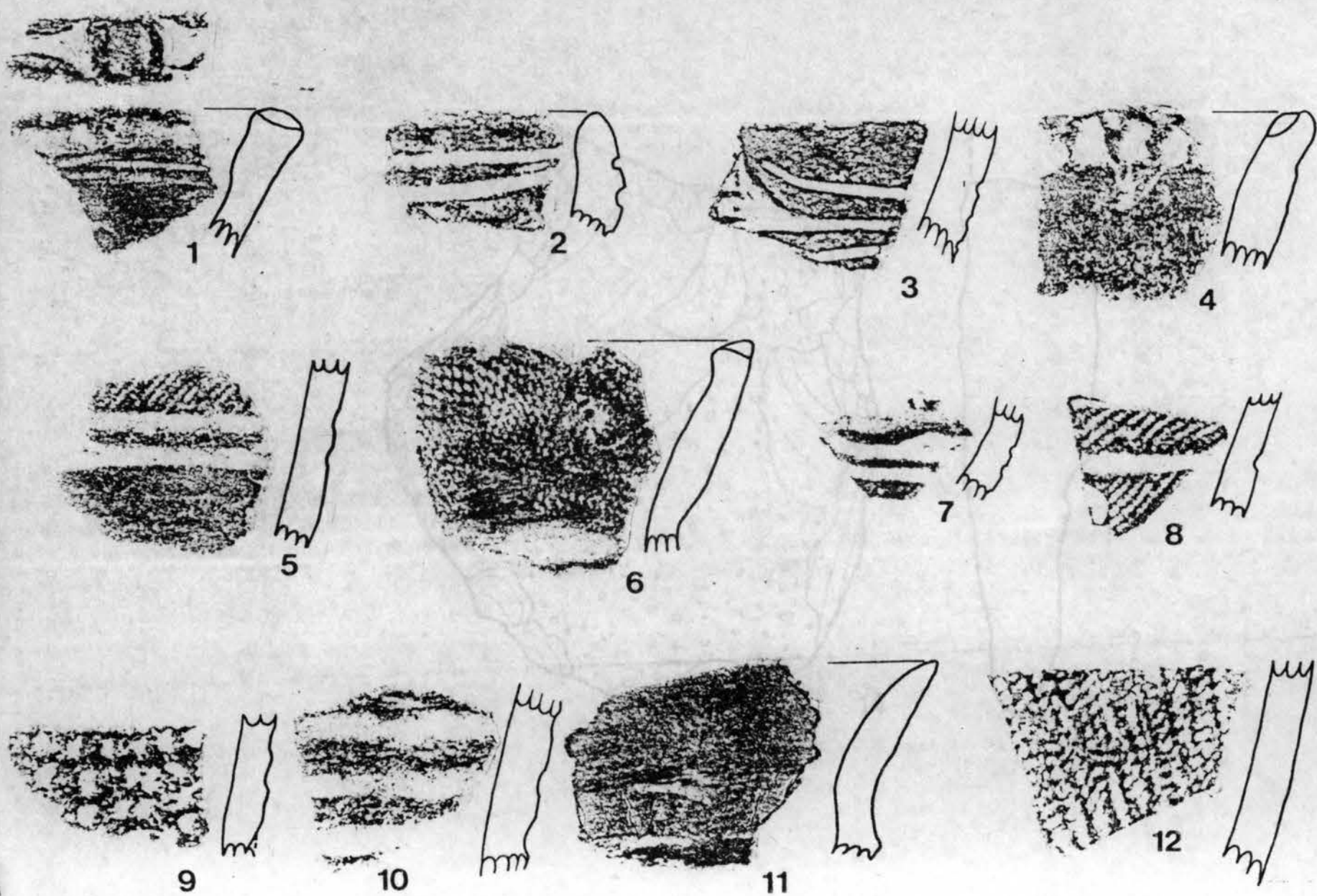
D 須恵器(第25図: 24)

一片のみの採集であり、杯の受け部片であり、6世紀末頃のものと思われる。和田山古墳群との関連が考えられよう。

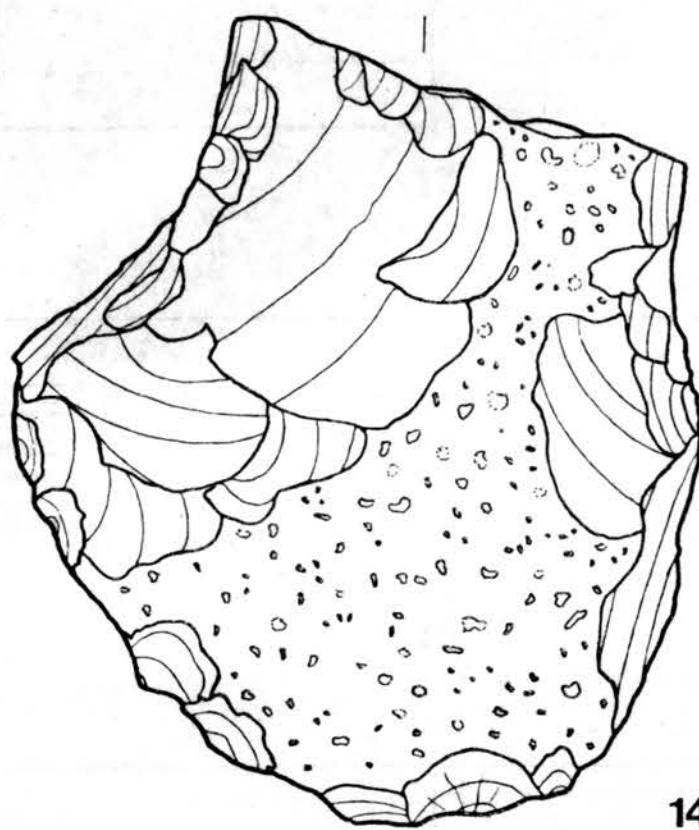
おわりに

本書は、道跡破壊の相つぐ中、早急に遺跡の存在とその状況を知っていただくため、無料で配布したものである。したがって、図版、文章の不統一等の不備はあるが詳細な検討は来年度発刊予定の活動報告3号に掲載予定である。
最後に、遺跡の時期等に関し吉岡康暢氏の御協力を得た。記して謝意を表わしたい。

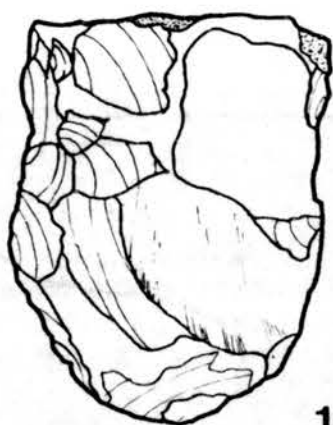
発行者 金沢大学考古学研究会
会長 青島清一
金沢市丸の内1-1 学士部21
1978.3.13. 発行
非売品



13



14

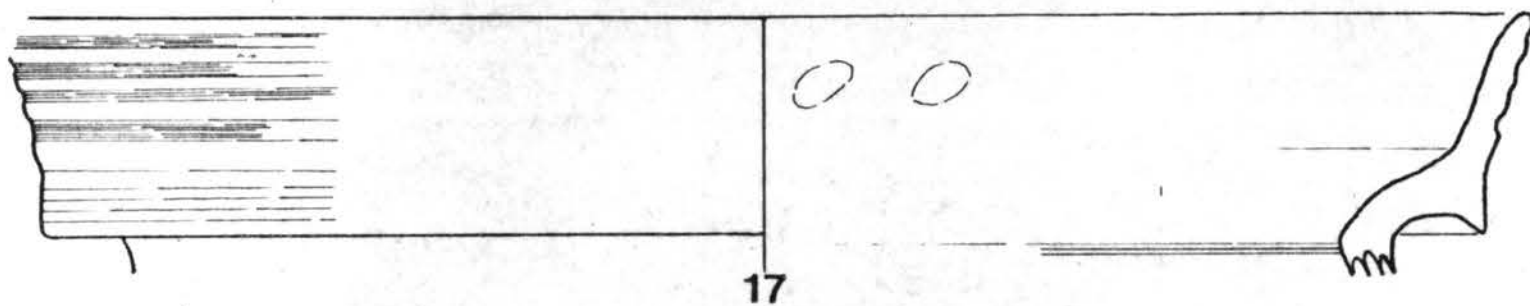


15

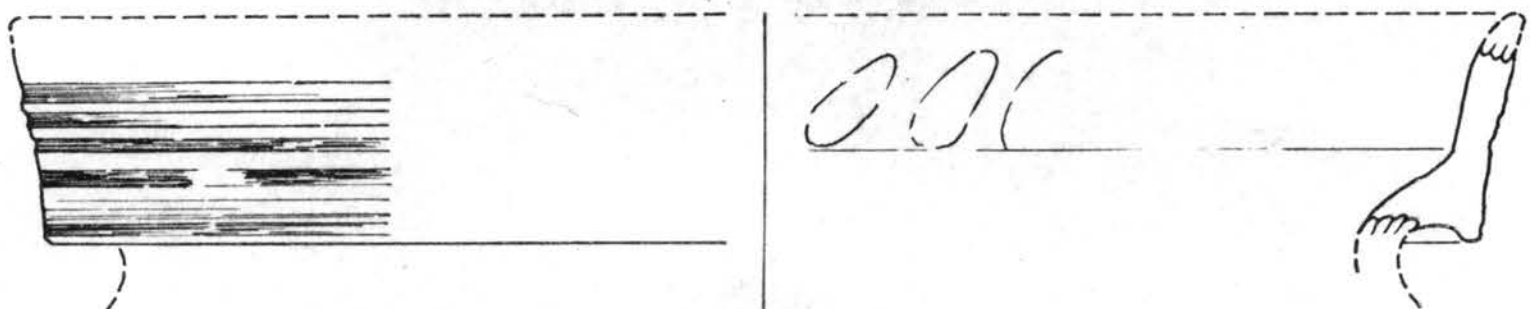


16

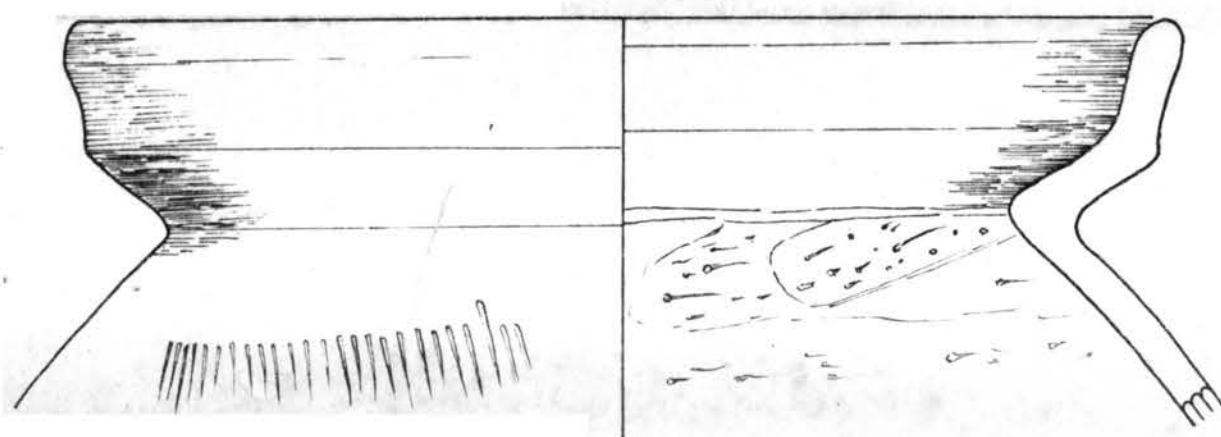




17



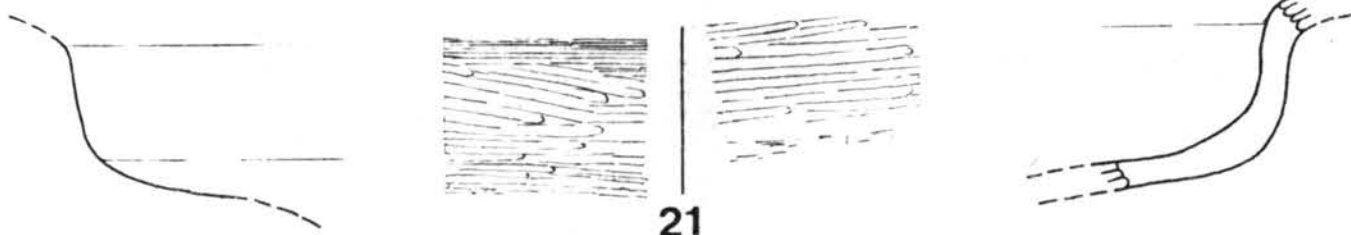
18



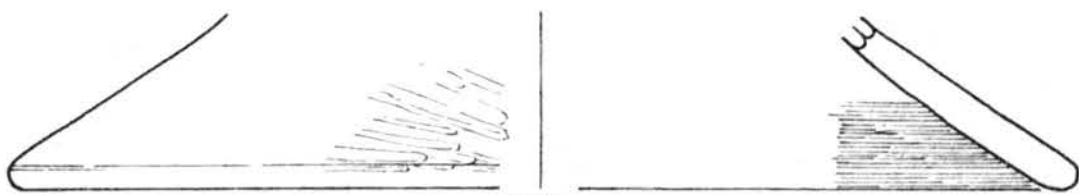
19



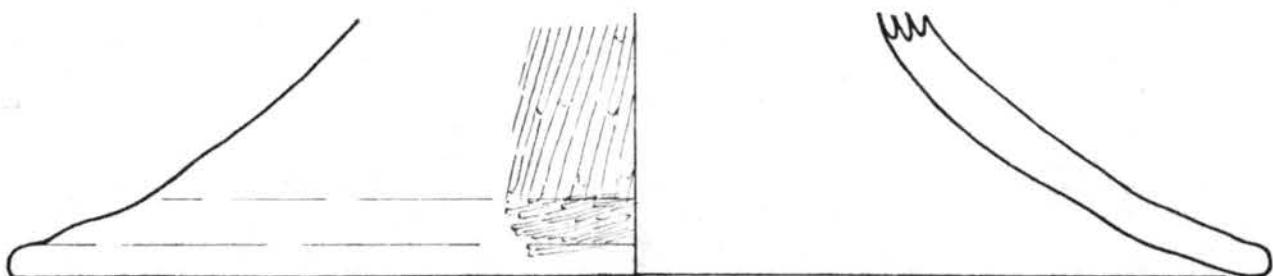
20



21



22



23



24

S=1/1